

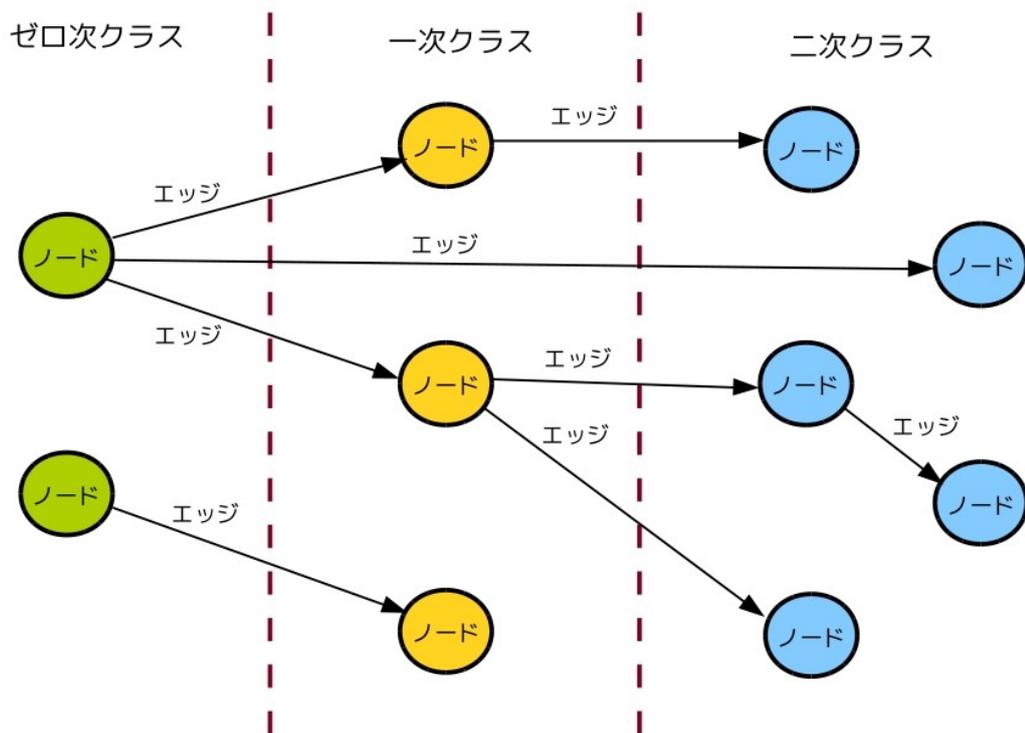
## 7. 「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の第2四半期(13世紀後半～14世紀後半)

### 7.1 商品経済モデルと貨幣経済モデル

本節で商品経済と貨幣経済の数学的構造に言及し、構造が二重化した経済空間を論じる。筆者の認識では、12世紀後半に経済空間の数学的構造が二重化した。経済空間の構造に関心のない読者は本節を斜め読みしてほしい(ちなみに、本書では人と人が交換する事物の存在領域を「経済空間」と呼ぶ。市場経済が生成した16世紀以降の人類史を論じる場面で、「社会」と呼ぶ場合もある)。

商品経済は下図(図11)のように三つのクラスのノード、それらノードをつなぐエッジ=辺を組み合わせた有向グラフモデルで表現できる(スキーム理論等を適用する経済学者=行動経済学者もいるようだが、商品経済はノードのクラス化が可能な位相構造である。「距離」はユークリッド距離である。極限や近傍は無視してかまわない)。

図11 商品経済の構造



上図の各ノードは「商品」を意味する。ゼロ次クラスのノード=ゼロ次クラス商品は素材商品である。すなわち、農産物や木材、鉱物等である。

素材商品は加工品ではない。したがって「ゼロ次クラス」という名称は妥当であると考え、とはいえ商品化する場面で作業が生じる。たとえば、コメを商品化するには乾燥して脱穀する必要があるし、小麦を商品化するには乾燥して脱穀した後、製粉する必要がある。伐採した原木を商品化するには製材する必要があるし、採掘した鉄鋼石を商品化するには製鉄する必要がある。同じことがサトウキビや肉類、石油等についても言える(ゼロ次クラス商品がそのまま商品化する場合もある。イモ類や魚介類、天然ガス等はそのまま商品化する場合が多い)。

一次クラスのノード=一次クラス商品は加工品である。一次クラス商品はゼロ次クラス商品を消費して生産する。したがって、一次クラス商品とゼロ次クラス商品の関係を上図のような向きを持つエッジ、すなわち有向グラフで表現できる。パンやバター、ハムやソーセージ等は一次クラス商品である。木製の椅子や机、鉄製のネジや釘、プラスチック製の食器も一次クラス商品である。コイルやコンデンサ、半導体素子等も一次クラス商品である。一次クラス商品は二次クラス商品の「部品」である場合が多い。

二次クラスのノード=二次クラス商品は二次加工品である。ふつう、二次クラス商品は一次クラス商品を消費して生産するが、ゼロ次クラス商品を消費して生産する場合もある。注視すべきことは、二次クラス商品を消費して二次クラス商品を生産する場合がある、ということである。スマート・フォンやパーソナル・コンピュータは二次クラス商品であり、飛行機や船舶、自動車も二次クラス商品である。どれだけ複雑化しても

大型化しても、二次クラス商品は二次クラス商品である。

(商品クラスの考えを基準にすると、排熱や廃物を再利用して再生産する商品が三次クラス商品である。現状、中古品やリサイクル品が三次クラス商品であるが、2020年頃からはじまる第三次産業革命の突破期に多種多様な三次クラス商品が誕生して普及する、と筆者は予想する。とはいえ、それら三次クラス商品は一次クラス商品や二次クラス商品に見える)

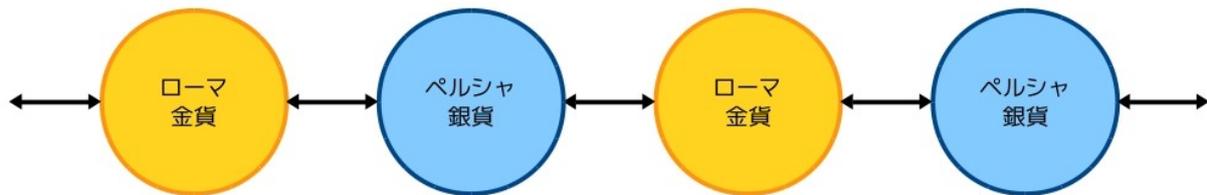
経済学者は、上図の各エッジ＝辺は物流を意味する、と論じるかもしれない。だが、そのような認識の下で商品経済を考察できるのは代数構造＝市場経済が生成して露呈した後である。

商品経済が誕生した頃のエッジは「人間」である。すなわち、「広義の近代」の出現期前半は個人商人がエッジであった。彼らは自身で商品を運送していた。現代のエッジは、運送や流通に携わる人々の人間労働であるが、顧客を獲得した自動車セールスマンが自身で車を運転して配車する場合もある。

商品経済を論じたもっとも有名な経済学者はピエロ・スラッファであるが、マルクスも位相構造＝商品経済を論じている。他方、マルクスは順序構造を見落とした。マルクスが見落とした順序構造＝貨幣経済は下図(図12)のような無効グラフのモデルで表現できる。

(理解を容易にするため、エッジの両端に矢印を付けたが、矢印は不要である。貨幣経済は順序構造であるが、もっとも知られている数学的順序構造は自然数である。下図のローマ金貨とペルシャ銀貨をそれぞれ偶数と奇数に置き換えても構造は同じである)

図 1 2 貨幣経済の構造



上図のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換規則は等比交換である。ローマ金貨の代わりにローマの物品貨幣を置き、ペルシャ銀貨の代わりにペルシャの物品貨幣を置くこともできる。言い換えれば、ローマ金貨とペルシャ銀貨はそれぞれ貨幣クラスを形成し、貨幣クラスの順序構造を構成する。

商品経済は12世紀後半に誕生した。そして貨幣経済に重畳する。商品経済が重畳した場面で、貨幣クラスを形成する物品貨幣がゼロ次クラス商品になる。他方、信用取引が増大して金貨が決済手段になり、銀貨＝銀が商品的側面を有する(コラム41)。

本章で、物品貨幣が消滅した後のユーラシア大陸東西(物品貨幣がゼロ次クラス商品化した13世紀後半～14世紀後半のユーラシア大陸東西)の動向を論じるが、家畜や穀物が商品化しても土地は商品化しない。また、奴隷が商品化するのには16世紀後半以降である。

#### コラム41： 決済手段と交換手段

古代社会では、「富(農産物や家畜、木材等)」は消える自然循環物で「財(土地や鉱物資源等)」は消えない非自然循環物である。しかし4世紀後半、財貨(金貨や銀貨)とそれら富や財の交換が可能になり、富と財がひとつの意味集合＝富財になる。

とはいえ、すべての富財が交換可能になったわけではない。どれだけ有用であっても、物品貨幣化していない富財(貨幣クラスに含まれない富財)は交換の対象から外れる。

(すでに述べたが、筆者は4世紀後半に誕生した貨幣経済は「全世界の金の価値と銀の価値は等価である」という巨大な等価交換観念の下で成立したと考える。むろん当時の支配者層に全世界の金と銀の量を算出することなどできない。しかし信仰＝国教が不可能を可能にした。筆者の考えでは、「等価交換」は実際に行われることのない巨大交換であり、想像の産物である。そのような想像の産物の下で貨幣クラス間の交換が成立していた時代が「広義の中世」である)

4世紀後半に貨幣経済が誕生し、金貨や銀貨の用途と流通範囲が拡大した。そして12世紀後半に商品経済が誕生し、銀貨＝秤量貨幣と貨幣クラス外の富財(家畜の飼料等)の交換も可能になる。その後信用取引が増大し、金貨が決済手段になり銀貨＝銀が交換手段になる。すなわち、金銀複本位制が高度化した。

しかし、「広義の中世」の成熟期後半(14世紀後半～16世紀後半)に高度化した金銀複本位制が崩壊する。そして幣制が銀本位制に変遷し、交換手段としても決済手段としても銀貨の使用が可能になる(金貨は残るが、役割を縮小する。他方、商品経済が肥大し、様々な事物やサービス、企業等が「商品」化する)。

銀本位制が古代に遡行して物品貨幣を再現する場面はなかったが、本位貨幣＝銀貨が代数構造＝市場経済を具現する。16世紀後半以降、「貨幣経済」という用語がもっぱら代数構造＝市場経済の下で用いる用語になり、「広義の中世」の衰退がはじまる(金銀複本位制が崩壊して銀本位制がはじまるまでの経緯は次章以降で論じる)。

ところで、経済学者の岩井克人氏は、著書「経済学の宇宙(日本経済新聞出版社)」で、「資本論」第1巻第1篇を引用しながら貨幣＝金を論じ、マルクスの「無理」を指摘している。しかしマルクスが「資本論」第1巻第1篇で論じたのは商品化した金の下で生じる市場経済＝代数構造である。

私見であるが、マルクスは資本主義経済を論じる前に資本主義経済の土台を構成する市場経済を論じる必要がある、と考えた。そのため、市場経済下での金の商品的使用価値を論じ、貨幣の交換価値を論じた(他方、マルクスは「資本論」第3巻で資本主義経済下での金の資本的使用価値を論じている)。

代数構造＝市場経済の下で貨幣がひとつに収斂する(すなわち「本位貨幣化」する)が、順序構造はふたつの貨幣を要する。しかし、マルクスは「資本論」で貨幣と貨幣の交換を論じていない。岩井氏も順序構造を見落としている。

両替＝貨幣交換は商品交換の一形態のように見えるが、根底に順序構造が存在する。すなわち、可逆な対称性を保証する何らかの制度がなければ、貨幣交換は具現しない(土地も同様である。土地と土地の交換が非対称な商品交換として成立する場面は稀である。現代社会においても、土地は概ね非商品＝財産として存在する)。

ちなみに、貨幣ゼロ記号論や貨幣ビッグバン論等は経済学者が順序構造あるいは貨幣が複数存在するという現実の「不都合」を隠蔽する方便にすぎない、と筆者は考える。筆者の考えにしたがえば、2007年のサブプライム住宅ローン危機と2008年のリーマン・ショックの根底に順序構造の問題が存在する。

(貨幣ゼロ記号論等を提唱する経済学者や社会学者たちが、市場は等価交換の場であり、市場間の交換＝市場経済が不等価交換の場である、と論じる場合があるが、大きな間違いである。市場での交換も市場間の交換と同様な不等価交換であり、結果的に等価交換に見えるだけである。共同体間の交換関係を論じながら帝国間の交換関係を見落とし、順序構造を見落とした人々が「無理」を承知で「間違い」を論じている)

## 7.2 世界帝国の誕生

即位後、大カン・モンケ(在位1251~1259年)は肅正を行い、官僚機構を整備してモンゴル帝国の中央集権体制を強化する。「大肅正」下で、オゴディ家の勢力が縮小し、天山山脈以北に押し込められた。また、反抗的なチンギス・カンの次男チャガタイの家系もイリ川以西=トランスオクシアナ地方に押し込められた。以後、モンゴル帝国はチンギス・カンの四子(ジョチ、チャガタイ、オゴディ、トルイ)のうち末子トルイの家系が支配する。

モンケの代は、トルイの四子(モンケ、クビライ、フレグ、アrikブケ)が「帝国」を支配した。とはいえジョチ家を継ぐバトゥ、チンギス・カン諸弟の家系=東方三王家を束ねるタガチャルは例外である。モンケはジョチ・ウルスの開国を認め、他方、東方三王家の遼河流域と沿海州、および河北の一部支配を認める。そしてクビライに南征を命じ、フレグに西征を命じた。

クビライは現在の内モンゴル自治区ドロンノール県に拠点(以後、「上都」と呼ぶ)を建設し、軍を編成して関中に向かう。前章で述べたが、オゴディの代にモンゴル軍が南宋軍に大敗した。敗因を熟考したクビライは、騎兵と歩兵の混成軍を編成する。そのため、行軍が遅くなる。しかもクビライは荒廃した淮北を横断することも長江を越えることも無理と判断し、大理国からの侵攻を考えた。

クビライは関中から現在の雲南省に向かい、大理国に侵攻してその地を支配する。そしてその後の統治を副将ウリヤンカダイに委ね、自身はいったん上都に帰還する。おそらく、新たな軍を編成して再度南下し、自軍が南宋軍を引き寄せウリヤンカダイ下のモンゴル軍が南宋の首都臨安(現在の杭州市)に侵攻する作戦を立てていたように思う。だが、悠長な戦略にモンケが激怒した。

モンケはクビライを南征軍総司令から外し、自身が軍を編成して現在の四川省に進軍する。他方、東方三王家を束ねるタガチャルに江南制圧を命じた。タガチャルは襄陽(現在の湖北省襄陽市)まで進軍するが、立往生して撤退する。激怒したモンケは、クビライに再度江南制圧を命じる。他方、タガチャルに臨安への直接的な進軍を命じる。

クビライとタガチャルはうんざりしたと思う。両名とも漢人官僚を多数抱え、南宋の兵力と財力に精通している。しかしモンケの側近はペルシャ人官僚だけである。だが、両名にとって幸いなことに、モンケは四川省で病死する(ちなみに、モンケの「死」は暗殺と無縁である。モンケはユークリッド幾何学にも精通していた「学」の人であった。そのため、遠征に耐える体力を持ち合わせていなかったように思う)。

モンケの死後、クビライとアrikブケの抗争がはじまるが、それについて述べる前に西征したフレグについて述べる。フレグ率いる西征軍はホラーサーン地方を目指した。途中、ジョチ・ウルスやトランスオクシアナ地方のモンゴル兵が合流し、西征軍は巨大化する。

当時、イスマーイール派の分派=ハザール派教団がイラン高原北部のアルボルズ山脈内に砦を築き、共同生活を営んでいた。サマルカンドに到着したフレグは、ハザール派教団が大カン・モンケの暗殺を企てたこと、西征目的は彼らを葬り去ることであり、各地のムスリム諸侯も合流して「異端」の抹殺に協力するよう呼びかけた。

まず、ルーム・セルジューク朝スルターン率いるムスリム連合軍が合流する(前章で述べたが、ルーム・セルジューク朝は1243年のキョセ・ダグの戦いでモンゴル軍の別働隊=タマ軍に惨敗し、その後モンゴル帝国に服属していた)。他の地方からもムスリム諸侯が合流する。フレグは大軍でハザール派教団の砦を包囲し、包囲の輪を徐々に縮小して圧迫する。

ハザール派教団の教主フルシャーが降伏し、その後西征軍はメソポタミアに向かいバグダードを占領してアッバース朝カリフを殺害する。1258年、アッバース朝イスラーム帝国は名実ともに滅亡した(ちなみに、カリフ殺害の原因は「感情の繯れ」であつたらしい。フレグ率いるモンゴル兵がバグダードで殺戮を行い、カリフを殺害して「知恵の館」も破壊したと論じる歴史家もいるが、疑わしい)。

カリフ殺害後、西征軍=モンゴル軍はシリアに侵攻してアレppoを陥落する。だが、大カン・モンケが死去したため、フレグは軍の一部をキト・ブカに預け転進する。バイバルス率いるの мамルーク朝ムスリム軍がキト・ブカ率いるモンゴル軍を殲滅したことはコラム37で述べたが、フレグは報復できなかった。

フレグは、クビライが上都でクリルタイを開き、「大カン」に即位したことを帰路の途中で知る。クビライとアrikブケの抗争は必定で、トランスオクシアナ付近に残留して行方を見守るしかない。その判断は妥当であったが、しかしフレグは大きな間違いをひとつした。

フレグは、タブリーズ(カスピ海東南のイランの古都)を拠点にして残留する。そのためジョチ・ウルスのカン=ベルケが激怒した(バトゥは1256年に死去した。そしてバトゥの弟ベルケがジョチ・ウルスのカンに即位していた)。なぜなら、ベルケはコーカサス地方全域とアルメニアや小アジア、そしてバルカン半島の全域支配を目指していたからである。

(小国であったが、パレオロゴス朝がコンスタンティノープルを奪還してビザンツ帝国が復興している。版図内に多数の東方正教徒を抱えるベルケにとって、聖地コンスタンティノープルの保護は責務であり、アルメニアや小アジア等を支配下に置く必要があつた。ちなみに、ベルケは熱心なムスリムである。ベルケにとって、フレグのカリフ殺害は許せない行為であつたかもしれない。歴史家の多くが、そのような視点でベルケとフレグの抗争を論じている)

フレグの西征軍に合流したジョチ・ウルス出身のモンゴル兵たちは、マムルーク朝に逃れ、ビザンツ帝国を経由して帰国している。ベルケは大軍を率いて南下した。フレグも大軍を率いて応戦する。ベルケとフレグの抗争がはじまったが、それと並行してクビライとアリクブケの抗争もはじまる。

クビライは、漢江を渡り長江を渡ろうとした場面でモンケの死を知る。だが、クビライは帰還しない。彼はそのまま長江を渡り、大理国で駐屯していたウリヤンカダイ率いるモンゴル軍の帰りを待つ。さらに四川省で展開していた故モンケの遠征軍本隊を吸収し、他方、南宋の宰相賈似道と和議を結ぶ。その後北進してタガチャルと合流する。そして、上都でクリルタイを開き、「大カン」に即位した。

他方、モンケの遺臣たちはトルイの末子アリクブケを推戴する。アリクブケはモンケの葬儀を済ませた後、カラコルムでクリルタイを開く。アリクブケも「大カン」に即位した。

歴史家や社会学者たちは、遊牧民社会は部族間の合議で成り立っており、クリルタイは部族間の政治的な会議の場であった、と論じている。彼らの考えにしたがえば、クビライが開いたクリルタイは非正式なクリルタイで、アリクブケが開いたクリルタイが正式なクリルタイである。すなわち、モンゴル帝国の正当な帝位後継者はアリクブケであり、クビライは帝位篡奪者である。

だが、遊牧民社会が部族間の合議で成り立っているとしても、クリルタイが部族間の政治的な会議の場であったとの確証がない。クリルタイは、おそらく軍議であった（現実には、モンゴル帝国はクリルタイを開いた後に遠征をはじめている）。軍議である以上、クリルタイはどこで開いてもよいし、軍議に正式も非正式もない。ようは多数の部族長と多数の軍団、多数の兵士が集まればよいのである。クリルタイで即位する大カンは、平たく言えば「大元帥」である。

それぞれ大カンに即位したクビライとアリクブケの抗争がはじまったが、戦闘はクビライ側が一方向的に押し込んでいる。

クビライは、おそらくモンケの死を知ったときからアリクブケと一戦交える覚悟を固めていた。したがって帰還を遅らせ、大軍を編成した。しかも穀物の生産地はモンゴル高原ではなく河北である。クビライは決戦の場面＝シムルトウ・ノールの戦いで「鶴翼の陣」を構え、飢えに苦しむアリクブケ下のモンゴル兵を包み込む。アリクブケは後退を繰り返し、1264年に降伏した。アリクブケの降伏が意外に遅いのは、クビライが同胞の殺害を極力避けたためである。

アリクブケ降伏後、クビライは戦後処理を行い上都に遷都する。そして、ベルケとフレグに停戦を命じ、クリルタイ開催を通知して上都に赴くよう命じる。また、アリクブケに反旗を翻してトランスオクシアナ地方を支配していたチャガタイ家のアルグにも上都に赴くよう命じる。

だがフレグは1265年に死去し、ベルケが1266年に死去する。同じ頃、アルグも死去する。後の三大ウルス（ジョチ・ウルス、フレグ・ウルス、チャガタイ・ウルス）の当主全員がほぼ同時に死去したため、クビライはクリルタイを開催できなかった。しかしジョチ・ウルスの独立とフレグ・ウルスの開国を認め、他方、チャガタイ家傍流のバラクをトランスオクシアナ地方に送り統治を委ねる。

ところで、歴史家や社会学者の一部が、モンゴル帝国を「通商帝国」と呼び、陸運と海運が世界帝国＝モンゴル帝国を支えたと論じている。しかしクビライが大カンに即位した頃の陸路は兵站路であった。すなわち、中央アジアや西アジア、ユーラシア大陸西北部等で展開するモンゴル軍に河北の富（家畜や穀物）を輸送するための手段であった。ジョチ・ウルスもフレグ・ウルスも大カンの仕送りに頼っていたのである。

だが、独立や開国を認めるということは、仕送りを停止あるいは削減する、ということでもある。バラクをトランスオクシアナ地方に送ったのも、おそらくトランスオクシアナ地方への仕送りを停止あるいは削減するためである（そうしなければ、大軍の編成を要する南宋遠征が容易にやれない）。

モンケの代に事実上独立していたジョチ・ウルスの場合、仕送りの停止や削減が大きな苦痛になる場面はなかった。フレグ・ウルスには厳しい措置であったかもしれないが、途中で合流したモンゴル兵が帰還し、兵員数が減少していた。したがって、メソポタミアやイラン高原の富＝穀物等で残ったモンゴル兵を養うことができた（そもそも、フレグ・ウルスのモンゴル兵は大多数がペルシャ人である）。しかしバラクは仕送りに頼ることなくトランスオクシアナ地方を統治しなければならない。だが、モンゴル兵は農耕と無縁で、軍の維持は容易でない。バラクはフレグ・ウルスに侵攻する。

フレグの死後、彼の長男アバカが「カン」に即位し、フレグ・ウルスを統治していた。フレグ・ウルスのモンゴル軍は縮小していたが、バラクが侵攻した場面でルーム・セルジューク朝ムスリム軍が合流する。1270年、ホラーサーン地方のカラ・スウ平原でバラク率いるチャガタイ・モンゴル軍とアバカ率いるフレグ・モンゴル軍が激突し、撤退を装いながら奇襲を仕かけたアバカが勝利する（当時のルーム・セルジューク朝ムスリム軍は事実上の「ビザンツ軍」で、騎乗するビザンツ産大型馬の脚力が奇襲を可能にしたように思う）。バラクは敗走し、翌1271年に死去する。その後オゴディ家の当主カイドウがトランスオクシアナ地方を含む中央アジアを支配する。

ところで、アバカの妻はパレオロゴス朝ビザンツ皇帝ミカエル8世が下嫁した皇女マリア（デスピナ）である。事実上の「カン」として当時のジョチ・ウルスに君臨したノガイの妻もミカエル8世が下嫁した皇女エウフロシュネーである。アバカにとってもノガイにとっても、大カン・クビライは大きな存在ではなかったように思う。ビザンツ皇帝ミカエル8世こそが彼らの皇帝であり「父」である。フレグとベルケの死後、アバカとノガイは互いの義兄弟関係を堅持した。おかげでフレグ・ウルスとジョチ・ウルスの敵対関係が解消する。

バラク率いるチャガタイ・モンゴル軍を撃退した後、アバカ率いるフレグ・モンゴル軍はシリアやパレスチナでカラウーン率いるマムルーク朝ムスリム軍との戦闘を繰り返す。互いに大型馬を有する騎馬軍団の戦闘は壮絶であったと思うが、フレグ・モンゴル軍は1281年のホムスの戦いで大敗する。そして翌1282年、アバカが死去する。

(同年、テッサリアで反乱が勃発し、ミカエル8世がトラキア戦役で死去するが、ノガイはビザンツ帝国に援軍を送っている。シチリア晩禱事件も1282年に勃発しているが、仮にカルロ1世率いるシチリア軍がビザンツ帝国に侵攻してもノガイ率いるジョチ・モンゴル軍が撃退したように思う。ちなみに、東方正教会＝ロシア正教会がジョチ・ウルスの首都サライに主教座を設置したのは1261年である)

なぜか作品がないが、13世紀後半のパレオロゴス朝ビザンツ帝国は小説の題材が豊富である。アバカもノガイもキリスト教徒で、彼らは「父」のために戦った。アバカとマリアの夫婦仲はよく、モンゴル兵たちはマリアを敬愛していたようである。アバカの死後、マリアはコンスタンティノープルで修道院生活を送る。

1295年、アバカの孫カザンがフレグ・ウルスのカンに即位し、イスラーム教に改宗するが、ビザンツ帝国とフレグ・ウルスの友好は続く。パレオロゴス朝ビザンツ帝国はフレグ・ウルスから古代ギリシャの哲学や自然学、ヘレニズム期のストア哲学や新プラトン主義等を「輸入」した。

東ローマ皇帝ゼノン(在位474～491年)がコンスタンティノープルからネストリウス派キリスト教神学者を追放したが、サーサーン朝ペルシャが彼らを受け入れる。ネストリウス派キリスト教神学者たちはジュンディーシャーポール学院で暮らし、古代ギリシャの哲学や自然学、ヘレニズム期のストア哲学や新プラトン主義等を編纂した。

その後東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世がアカデメイアやリュケイオンの哲学者や自然学者たちを追放したが、サーサーン朝ペルシャは彼らも受け入れる。彼らもジュンディーシャーポール学院で暮らし、古代ギリシャの哲学や自然学、ヘレニズム期のストア哲学や新プラトン主義等を編纂した。そして彼らの後継者たちが、アッバース朝期にバグダードの「知恵の館」に移る。その後原理主義者ムタワッキルがダマスカスに一時遷都した場面で、おそらくタブリーズとその周辺に逃れた。

サーサーン朝ペルシャでは、タブリーズとその周辺(オルミーエ等)がゾロアスター教の聖地である。そして、アッバース朝は、イスラーム教徒に布教しないという条件を付けて、ゾロアスター教や他の信仰を容認した。アッバース朝期に、タブリーズとその周辺が異教徒や異端信徒、神学者や哲学者のアジュール＝避難所になる。

タブリーズとコンスタンティノープルは近い。そして、パレオロゴス朝ビザンツ帝国も異端や異教に寛容である。フレグ・ウルスから古代ギリシャの哲学や自然学を「輸入」したパレオロゴス朝ビザンツ帝国が、それらを西ヨーロッパに「再輸出」し、西ヨーロッパの近代化＝ルネサンス運動を促進する。

(フレグ・ウルス滅亡後、タブリーズとその周辺の歴史は破壊と略奪の歴史になる。現在のタブリーズはイラン・イスラーム共和国の都市のひとつで、人口は約146万、住民の大多数がアゼルバイジャン人でシーア派イスラーム教徒である。ゾロアスター教会やネストリウス派キリスト教会の遺跡は見当たらない。ちなみに、アゼルバイジャン＝アーザルバーイジャンはペルシャ語である。意味は「火の国」)

アリクブケ討伐後、クビライはアバカとモンケ・テムルの争い、および「謀反」を抑止する目的で四男ノムガンに中央アジア(イリ川流域のオアシス都市アルマリク)に送る。他方、漢人兵をひとつにまとめ、南征に投入する(ちなみに、モンケ・テムルはベルケの死後即位したジョチ・ウルスのカンである。彼はベルケ同様熱心なムスリムで、首都サライを大都市に発展させた。しかし1280年に死去する。その後キリスト教徒のノガイが事実上の「カン」になる)。

1268年、約10万のモンゴル遠征軍(主力は漢人兵)が南宋のふたつの要塞(南宋が長江と漢江が合流する地点に建設した襄陽と樊城)を包囲する。そして約5年包囲し続ける。1273年、補給を断たれ援軍も断られたため、ふたつの要塞を死守していた呂文煥が降伏した。翌1274年、クビライは中央アジアと南宋の制圧を決意する。右丞相アントン率いるモンゴル軍がノムガンに合流し、左丞相バヤン率いるモンゴル軍が南下して南宋の首都臨安を陥落する。

南宋制圧後、アントンに従軍して中央アジアに赴いたモンケの四男シリギが反乱を起こし、ノムガンとアントンを捕縛する。南宋を制圧したバヤンが急遽北伐軍を編成し、中央アジアに赴く。シリギはノムガンをジョチ・ウルスのモンケ・テムルの元に送り、アントンをカイドウの元へ送って援軍を要請した。だがモンケ・テムルもカイドウも援軍を派兵しない。シリギ下の反乱軍はバヤン下の北伐軍に打ちのめされ自壊する。シリギは捕らえられ流罪になった。その後カイドウが中央アジアを支配する。

(臨安を陥落したバヤン下のモンゴル兵が略奪を行わなかったことは特筆に値する。クビライは略奪を戒めていたが、彼の次男チンキムと漢人プレーンの姚枢がクビライ以上に略奪を戒めていた。当時のモンゴル帝国にとって必要なものは、臨安の「財」ではない。必要なものは江南の「富」であり、略奪を行わなかったことが江南の平和的支配を可能にする)

南宋制圧後、クビライは東シナ海沿岸都市との交易を重視した。歴史家や社会学者たちは、アラビア商人やペルシャ商人との交易を重視したためである、と論じている。だが、大きな理由が他にある。

南宋の富＝物産は莫大で、当時の江南は米と絹織物の産地である。しかし淮北は荒廃している。他方、すでに建設を開始していた新都＝大都(現在の北京市)は運河を使って渤海湾の拠点(現在の天津市付近)から物資を搬入する仕組みが整っている。したがって、江南の米や絹織物は陸路より海路で河北に輸送するほうが容易である。とはいえ、おそらく上都と大都、およびその周辺が江南の富＝物産を独占した。それが種いの種になる。

クビライは1274年に中央アジアと南宋の制圧を決断した場面で、二度目の日本遠征も決断している。1281年、高麗の合浦(現在の昌原市。2010年まで馬山市であった)から約900隻の艦隊が日本を目指して出港する。他方、臨安に隣接する慶元(現在の寧波市)から約3500隻の大艦隊が日本を目指して

出港する。兵員は総勢15万で、大多数が高麗兵と旧南宋兵であった。第2回日本遠征軍は惨敗するが、クビライが得た痛手ではさほど大きくない。南宋制圧後、クビライは約40万の旧南宋軍を無傷のまま得ている。クビライは三度目の日本遠征の準備に取りかかる。だが、1287年に東方三王家の大反乱が勃発し、遠征計画が頓挫する。

歴史家の杉山正明氏は、日本遠征のための造船で遼河流域や沿海州の森林を伐採したこと、遼河流域や沿海州の民衆に賦役を課したことが大反乱の原因であったと、述べている。だが、遠征軍が出港する場所は合浦と慶元であり、造船もその近辺で行われたはずである。したがって、造船で使用する木材は長江流域や韓半島の森林を伐採して使用するほうが合理的である。また、遼河流域や沿海州の人々が技術を要する造船作業に従事するのは困難である。筆者は、東方三王家の大反乱は上都と大都、その周辺が江南の富、とりわけコメを独占したために生じたと推理する(ただし、本当に遼河流域や沿海州の森林を伐採して造船で使用したとすれば、輸送で要する労力は莫大になると考えられ、杉山氏の言説が当てはまる)。

前章で、タガチャルが東方三王家を束ねていたと述べた。だが、タガチャルは1278年に死去し、嫡子のアジュルも死去する。その後タガチャルの孫ナヤンが東方三王家を束ねる。「大反乱」の中心人物はナヤンである。しかも中央アジアを支配するカイドウがナヤンに迎合する。クビライは精強な親衛軍と高麗軍、約40万の旧南宋軍を抱えていたが、大軍を指揮する総司令が不在であった(当時、クビライの正室チャブイが生んだ息子たちは全員死去していた)。

クビライは生涯最大の危機に直面した。クビライは、自身が総司令に就き、戦象に乗って戦う(クビライは1215年生まれなので、当時の年齢は72歳である)。大反乱は約1カ月で終息し、ナヤンは捕らえられて撲殺された。東進していたカイドウは引き返す。その後東方三王家の一角を占めていたカダアン率いる軍勢が遊撃戦を続けるが、1292年頃に消滅する。東方三王家の大反乱後、クビライは執政に専念し、1294年に死去する(コラム42)。

ところで、モンゴル帝国が遼の後継国であるとすれば、耶律大石が支配した西遼の地＝トランスオクシアナ地方は大カンが支配しなければならない。したがって、テムジン＝チンギス・カンがトランスオクシアナ地方まで支配した。時代が変わっても、トランスオクシアナ地方は大カンの支配地である。

アリクブケ討伐後、クビライはジョチ・ウルスとフレグ・ウルスの開国を認め、大都＝北京の建設を決定し、国号を定めた。クビライが定めた国号は「大元(以後、「元」と呼ぶ)」であるが、クビライが描いた絵にしたがっても、トランスオクシアナ地方を含む中央アジアは元＝大元ウルスの一部である。

クビライの死後、チンキムの三男テムルが大カンに即位する。テムルは凡庸であったが、元の官僚機構は完成していた。元は中央アジアの完全支配を目指す。とはいえ、武力を行使する必要はない。江南の富＝物産を分配して現地の部族を「骨抜き」にすればよい。

テムル即位後、カイドウ下のモンゴル部族が元に帰順しはじめた。焦ったカイドウが東征を開始する。モンゴル高原とタリム盆地でカイドウ下のモンゴル軍と元軍の戦闘が勃発した。とはいえ元には約40万の旧南宋軍が存在する。圧倒的な元軍の前にカイドウ下のモンゴル軍は惨敗した。

1301年、カイドウが戦死する。カイドウの死後、オゴディ家に支配されていたチャガタイ家が浮上する。チャガタイ家の当主ドゥアはカイドウの葬儀を行い、その後テムルに臣従する。そしてオゴディ家を根絶やしにした。

ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、元＝大元ウルスが鼎立する「世界帝国」が完成したが、1307年にテムルが死去する。中央アジアを統治していたカイシャン(テムルの兄ダルマバラの長男。カイドウとの戦いで奮戦し、カイドウの死後、中央アジアを統治していた)が急遽上都に赴き大カンに即位する。そして鼎立体制を覆す。カイシャンは、中央アジアの独立、すなわちチャガタイ・ウルスの開国を承認した。モンゴル帝国は四つの国(ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、チャガタイ・ウルス、元)の連邦になる。

ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、元が鼎立した後、クビライは商税を制定した。とはいえ元が商税を徴税する場面は版図内に商品が入った場面だけである。すなわち、商税は関税であった(したがって商税を徴税する場面は一度だけである。商税は元朝の歳入にあまり寄与していない。元朝の歳入の約8割が専売品＝塩等の売却益である)。

カイシャンがチャガタイ・ウルスの開国を承認したのは、物流が中央アジアのシルクロードに依拠する場面が低下していたからである。ジョチ・ウルスとの交易は「草原の道」を使うほうが便利である。フレグ・ウルスとの交易は海路を使うほうが便利である。中央アジアの支配をめぐる争いは不毛な争いであり、開国を認めて仕送りを停止するほうがよい。しかしカイシャンの考えに甘さがあった。

南宋制圧後、クビライは南宋が発行した会子を無効にして中統鈔(中統元宝交鈔)を発行した。会子同様、中統鈔も専売品＝塩等と交換できた。だが会子とちがい、償還期限がない。中統鈔は手形や債券ではなく貨幣＝紙幣である。

クビライは、中統鈔の無期限使用を可能にする手段として、金銀との交換を保証した。すなわち、中統鈔は金銀兌換紙幣であった。だが、同時にクビライは金銀の私的売買を禁止する。クビライが発行した紙幣＝中統鈔は元朝の出先機関＝平準行用庫でなければ銀＝世界通貨と交換できない「地域通貨」であった。

江戸時代の徳川幕府は、日本の金山と銀山をすべて支配した。クビライが版図内の金山と銀山をすべて支配していたとしても不思議ではない。また、金銀の私的売買を禁止するのは当然である。だが、金銀の密貿易は容易に行える。版図内の金山と銀山をすべて支配し、物流を支配しても、外部から流入する金銀を支配するのは容易でない。そして、厄介な外部がひとつ存在する。目的を達成するには、その厄介な外部を排除あるいは支配しなければならない。すなわち、黄金の国＝日本を排除あるいは支配しなければならない。

クビライは、十分な数量の金銀を確保してから金銀兌換紙幣＝中統鈔を発行したわけではない。とはいえ、初期の中統鈔は会子の代替手段として通用した。だが普及すれば行き詰まる。クビライにとって、日本遠征は必定であった。しかし二度目の日本遠征も失敗する。その後東方三王家の大反乱が勃発する数年前、クビライは金銀の私的売買を解禁する。テムルの代も金銀解禁が続いた。

だが、カイシャンは新紙幣＝至大銀鈔を発行し、金銀の私的売買を再度禁止する(若いカイシャンが、版図内の金山と銀山を支配する必要性を十分認識していたとは思えない。また、カイシャンに日本遠征の意思があったとも思えない。彼は、たんにクビライの政策を追従したにすぎない)。

中央アジアという「赤字部門」を切り離れたカイシャンは、金銀の私的売買を再度禁止しても混乱が生じる場面はない、と判断したのかもしれない。だが、現実がカイシャンの政策を否定する。新紙幣＝至大銀鈔発行後、物流が停滞してインフレが勃発した。インフレにもっとも困惑したのは紙幣で俸給＝給与を得ていた文官たちである。即位してから約3年半後の1311年、カイシャンは死去するが、おそらく暗殺である。カイシャンの死後、実弟のアユルバルワダが即位し、金銀解禁を再開する(コラム43)。

金銀解禁を再開しても元朝が発行する紙幣が銀と等価な世界通貨になる場面はなかった。アユルバルワダ(仁宗)や次のシデバラ(英宗)は、「大カン」と呼ぶより中華風に「皇帝」と呼ぶほうがふさわしい。アユルバルワダ即位後、ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、チャガタイ・ウルスは正式な使節を送ることさえなくなる。他方、元朝は銅貨＝銅銭も発行して農税を徴税し、いわゆる「中華帝国」になる(カイシャンの代まで、元朝は農税を徴税していない)。

筆者は、元＝大元ウルスが世界帝国であったと認識しない。それでもモンゴル帝国が世界帝国であったと言えるのは、ジョチ・ウルスとフレグ・ウルスが存在したからである。世界帝国は元＝大元ウルスではなくジョチ・ウルスとフレグ・ウルスである。ただし、前章の最初の節で述べたように、封建国家に外在する。以後、慣例にしたがい、ジョチ・ウルスを「キプチャク・ハン国」、フレグ・ウルスを「イル・ハン国」、そしてチャガタイ・ウルスを「チャガタイ・ハン国」と呼ぶ。

(世界帝国は、元首が「立法者」として君臨する多言語多制度空間である。キエフ大公国では大公が、パレオロゴス朝ビザンツ帝国では皇帝が「立法者」として君臨した。ジョチ・ウルスとフレグ・ウルスはキエフ大公国やビザンツ帝国の支配体制を模倣しながら世界帝国を維持したように思う。ジョチ・ウルス＝キプチャク・ハン国の後継帝国がロシア帝国で、フレグ・ウルス＝イル・ハン国の後継帝国がオスマン帝国である。チャガタイ・ウルスは、世界帝国と呼べそうにないが、チャガタイ・ウルス＝チャガタイ・ハン国の後継帝国＝ティムール帝国は世界帝国と呼べるかもしれない)

#### コラム42: 高麗王の忠誠

本文で述べたように、テムジン＝チンギス・カンの死後、彼の三男オゴディが大カンに即位して金朝討伐をはじめが、並行して高麗遠征も開始する。1231年、モンゴル軍は高麗の首都開城(ケソン)を陥落した。高麗王朝は和議を求めたが、モンゴル側の献納要求は過大であった(1万枚の毛皮、2万頭の馬、100万人分の軍服、多数の奴隷等々)。

高麗王朝は朝廷を江華島に移し、韓半島内の各地で遊撃戦＝ゲリラ戦を展開する。他方、モンゴル軍は韓半島内の民衆を殺戮して農地を焦土化する。モンゴル軍と高麗遊撃軍の戦闘は四半世紀以上続いた。

1258年、高麗王高宗(コジョン)が降伏し、翌1259年に死去する。高宗の死後、彼の長男ウオンジョンが元宗に即位して高麗は元に服属するが、筆者が注視したいのはその後の高麗である。とはいえ元宗の施政や三別抄(サムピョルチョ)の反乱等ではない。

筆者が注視したいのは、元宗の死後、高麗王に即位した忠烈王(チュンニョルワン)である。韓国でも日本でも忠烈王の評判はよくない。洪茶丘などと同様に、「売国奴」と罵られたりしているが、筆者には忠烈王が暗君であったとは思えない。

忠烈王は1259年に人質としてモンゴル帝国に差し出され、1271年にクビライの娘を娶っている。当時、忠烈王は35歳で妃もいた。それでもクビライの娘を正室として迎えたわけだが、これには理由がある。

忠烈王が人質としてモンゴル帝国に滞在していた頃、クビライとアリクブケの抗争が勃発した。忠烈王はアリクブケに迎合することもできた。その場合、アリクブケは高麗の独立を認めたかもしれない。だが、忠烈王はクビライの軍門に下った。忠烈王には、クビライとアリクブケのどちらが勝ち残るかは不明であったと思う。しかしクビライの軍門に下ったのは正しい判断であった。なぜなら、東方三王家を束ねるタガチャルがクビライに合流したからである。

忠烈王がアリクブケに迎合すれば、河北のモンゴル軍が高麗に侵攻する。アリクブケがどのような好条件を提示したとしても、高麗の民衆を戦火から守るにはクビライの軍門に下るしかない。忠烈王は、高麗の民衆を戦火から守るために、クビライの娘と結婚した。

第1回日本遠征の直前に元宗が死去し、忠烈王が即位した。忠烈王は文官と武官に弁髪令や胡服令を発令し、高麗の元朝色を強化するが、それにより高麗は元朝への献納を逃れた。

忠烈王は、第2回日本遠征のために約900隻の船舶をクビライに提供する。保身のために第2回日本遠征を提案し、それら船舶を提供したとの説もあるが、疑わしい。金銀兌換紙幣＝中統鈔を発行したクビライは、日本を支配しなければならなかった。他方、忠烈王が無償で約900隻の船舶を提供したとは考えにくい。クビライから見返りを得て、それら船舶を提供したはずである。「見返り」は、おそらく穀物である（四半世紀以上続いた戦乱により、韓半島は荒廃し、農地が焦土化していた。当時の高麗は食料を自給できる状況にない）。

第2回日本遠征後、東方三王家の大反乱が勃発し、忠烈王下の高麗軍もクビライの軍門下で戦うが、高麗軍が鴨緑江を越える場面はなかった。忠烈王は、元朝に忠誠を示しながら高麗の民衆を戦火と飢餓から救い、高麗の復興を目指した。

#### コラム43: 黄金の国(ジパング)＝日本

歴史家たちは、第1回日本遠征(文永の役)で元朝が被った損失はわずかであり、第2回日本遠征(弘安の役)で元朝が被った損失もわずかであると論じている。たとえば、歴史家の杉山正明氏は、第2回日本遠征は元朝の棄民政策であったとまで論じている。そして、二度の日本遠征に失敗したクビライが計画した幻の「第3回日本遠征」を、「面子の問題」であったと論じている。だが、面子のためにクビライが遠征を計画するとは考えにくい。

クビライが日本征服を目指した理由はあきらかである。日本の金山と銀山の支配である。筆者は、東方三王家の大反乱がなければ、日本の金山と銀山をすべて支配するまで、クビライは日本遠征を繰り返したと考える。

北宋に渡った日本僧の裔然が、第2代皇帝太宗に「東の奥州は黄金を産出し、西の対馬は白金＝銀を産出して租税とする」と上奏している。当時、日本の朝廷は対馬に毎年890両の銀を太宰府に納税するよう命じていた。また、生野銀山や石見銀山でも銀の産出が行われていた(石見銀山は、1309年に大内弘幸が発見したと伝えられているが、おそらく銀を採掘している場面を目撃したにすぎない)。

日宋貿易下で、日本は銀を輸出していた。したがって、金銀の私的売買を禁止して金銀兌換紙幣＝中統鈔を発行したクビライに黄金の国＝日本を征服しなければならない理由があった。元朝の使節に対する鎌倉幕府の野蛮な対応は、日本史の専門家や日本史マニアたちがしばしば指摘する「外交の無知」と無縁である。第2回日本遠征で大敗したクビライは金銀解禁を実施した。その後日元貿易が増大する。中央アジアを統治していたカイシャンは、日本が輸出する多量の金銀を見落としていた。

日本は、たんに金銀を輸出しただけであるが、それがモンゴル帝国を蝕む。そして約300年後に同様な場面が再現する。日本が輸出する多量の金銀が当時の初期帝国主義国家＝スペインを蝕む。

### 7.3 神聖ローマ帝国と東欧三国の外来王朝

フリードリヒ2世の死後、彼の次男コンラート4世がドイツ皇帝に即位したが、1254年に死去する。その後ホラント公ウィレム2世が即位したが、1256年に死去する。ドイツ帝国は「大空位時代」に突入し、皇帝の座をめぐる権力闘争が勃発した。他方、皇帝を選出する選帝侯会議が誕生する(ウィレム2世はドイツ帝国の名称を「神聖ローマ帝国」に改めている。以後、ドイツ帝国を「神聖ローマ帝国」と呼ぶ)。

1260年、ボヘミア王オタカル2世がクレッセンブルンの戦いでベーラ4世率いるハンガリー軍を破る。その後オーストリアとスロヴェニアを占領してボヘミア王国の版図を拡大し、神聖ローマ皇帝即位を目指す。だが、選帝侯会議はハプスブルク家のルドルフ1世(在位1273~1291年)を選出した。

即位後、ルドルフ1世はオタカル2世にオーストリアとスロヴェニアの返還を求める。しかしオタカル2世は応じない。ルドルフ1世はウィーンを包囲してオタカル2世を追放した。オタカル2世は、オーストリアとスロヴェニアを返還して追放令を解いたが、その後軍を編成して奪還を試みる。だが1278年のマルヒフェルトの戦いで敗北し、戦死する。オタカル2世の死後、彼の嫡子ヴァーツラフがボヘミア王ヴァーツラフ2世に即位する。ヴァーツラフ2世はルドルフ1世に臣従して彼の娘を娶る。

他方、ポーランドで216年ぶり(クラクフ司教スタニスワフを殺害したボレスワフ2世以来)にポーランド人国王プシェミスウ2世(在位1295~1296年)が即位するが、約1年後に暗殺された。プシェミスウ2世の死後、ポーランド貴族たちはボヘミア王ヴァーツラフ2世を推挙する。ヴァーツラフ2世はボヘミア王兼ポーランド王になるが、その後ハンガリーで異変が生じる。

1301年、アンドラーシュ3世が死去し、アールパード朝が断絶する。そしてヴァーツラフ2世の次男がハンガリー王ヴァーツラフ3世に即位する。1305年、ヴァーツラフ2世が死去したため、ヴァーツラフ3世はボヘミア王とポーランド王も兼ねる。だが翌年、ヴァーツラフ3世は暗殺された(当時のヴァーツラフ3世の年齢は16歳である)。

ヴァーツラフ3世の死後、東欧三国(ボヘミア=チェコとポーランド、ハンガリー)の王位が同時に空位になる。以下、14世紀の東欧三国の動向を論じる。

ボヘミアでは、1310年に神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世の長男ヨハン(チェコ名ヤン)がヴァーツラフ3世の妹エリシュカを娶り国王に即位する。ボヘミア王位がプシェミスル家からルクセンブルク家に移るが、ヨハンがボヘミアに愛着を抱く場面はなかった。彼がプラハに戻るのは銀貨や兵糧が枯渇した場面だけである。エリシュカがボヘミアの執政を担うが、彼女は1330年に死去する。

エリシュカの死後、ヨハンに同行していた彼の長男カールがボヘミアの執政を担う。他方、ヨハンは1346年のクレシーの戦いに参戦し、戦死する(ヨハンとエリシュカの夫婦仲は良かったが、ヨハンは人生の大半を戦場で過ごした。戦争が王の仕事であり、戦場が男の死に場所であると思い込んでいたようである。晩年のヨハンは失明していたが、それでもクレシーの戦いに赴いた)。

ヨハンが戦死する少し前、ローマ教皇クレメンス6世がヨハンの長男カールを「ドイツ王」に任じている。当時の神聖ローマ皇帝はヴィッテルスバッハ家(バイエルン家)出身のルートヴィヒ4世で、クレメンス6世はルクセンブルク家出身のカールを対立皇帝に擁立したとも言える。内乱が勃発しかねない状況が生じたが、1347年にルートヴィヒ4世が死去する。同年、カールはボヘミア王カール4世(チェコ名カレル4世)に即位する。

当時、ボヘミアのクトナー・ホラ市は銀の産地であった。カール4世は銀貨=プラハ・グロシュ銀貨の鑄造量を増大して財政を強化し、パリを模倣してプラハ市街を整備する。また、大学=プラハ・カレル大学を創立した。

(ボヘミアでは、ヴァーツラフ2世の頃から銀貨=プラハ・グロシュ銀貨を鑄造しはじめたが、国政に無関心であったヨハンがクトナー・ホラの銀産出量を重視する場面はなかった。プラハ・グロシュ銀貨の鑄造量が増大したのはカール4世の代である。そして16世紀前半まで、神聖ローマ帝国の正貨=準本位貨幣の役割を担う。ちなみに、プラハ・カレル大学は神聖ローマ帝国初の大学である)

1355年、カール4世(在位1355~1378年)は神聖ローマ皇帝に即位する。そして翌1356年、金印勅書を発布する。

金印勅書で、カール4世は選帝侯による皇帝選出を定め、他方、ローマ教皇による皇帝選定を排除した。それによりドイツとイタリアの支配者層が分離し、神聖ローマ帝国内で皇帝派と教皇派が対立する場面もなくなる。

とはいえ、大空位時代から選帝侯会議が存在していたし、また後述するアヴィニオン捕囚があったため、ローマ教皇は統治権力を喪失していた。したがって、歴史家たちは、神聖ローマ皇帝カール4世が金印勅書を発布した目的はハプスブルク家とヴィッテルスバッハ家の排除であった、と論じている。その認識は正しい。現実には、ハプスブルク家とヴィッテルスバッハ家は選帝侯に含まれていない。

だが、重視すべきことが他にあり、金印勅書で、カール4世は各選帝侯の所領内における裁判権、鉱山採掘権、関税徴税権、貨幣鑄造権、ユダヤ人の保護権を認めた。歴史家の一部が、カール4世は事実上の主権国家を承認したと論じている。しかしカール4世は各選帝侯の立法権を認めていない。カール4世が承認したのは「高度な自治」と呼ぶ程度のものである。とはいえ貨幣鑄造権を認めた意義は大きい。

カール4世が金印勅書を発布するまで、ヨーロッパの金貨は概ねフィレンツェが鑄造してローマ教皇が発行するフローリン金貨であった(ハンガリーが金貨を鑄造して発行し、ヴェネツィアも金貨＝ゼッキノを鑄造して発行していたが、流通量はフローリン金貨が圧倒している)。しかし、カール4世は各諸侯の金貨鑄造を認めた。金印勅書発布後、ヨーロッパの諸侯たちが独自の金貨＝グルデン金貨を鑄造して発行し始める。そして金融業者(主にユダヤ人)が両替サービスを提供し、信用取引が増大して金貨が決済手段になる(コラム44)。

ハンガリーでは、ベーラ4世(在位1235～1270年)の代に転機が訪れた。1241年のモヒの戦いでモンゴル軍に惨敗したベーラ4世は、貴族に王領を割譲して「県」を制定し、各県代表者による立法府も制定する。また、鉱山開発を促進して貴金属＝金等と塩の産出量を増大させ、悪化した財政を立て直す(ハンガリーでは、イシュトヴァーン1世の代から「県」が存在した。しかし各県が自治権を持ち代表者が国政に参加するようになったのはベーラ4世の代からである)。

ベーラ4世の死後、彼の長男イシュトヴァーンがハンガリー王イシュトヴァーン5世に即位するが、約1年後に死去する。イシュトヴァーン5世の死後、彼の長男ラースロー4世(在位1272～1290年)が10歳でハンガリー王に即位する。

成人した後、ラースロー4世は神聖ローマ皇帝ルドルフ1世に臣従し、前述したマルヒフェルトの戦いに参戦してボヘミア王オタカル2世を破る。だが、その後キプチャク人(大多数がイスラーム教徒)を招いて軍を増強し、王権を強化する。そのためローマ教皇に破門され、大貴族たちに暗殺された。ラースロー4世の死後、イシュトヴァーン5世の末子アンドラーシュ3世が即位する。アンドラーシュ3世の死後、上で述べたヴァーツラフ3世が即位し、彼の死後、ハンガリー王位が空位になる。

しかし1308年、ナポリ王国のカーロイ・ローベルトがハンガリー王カーロイ1世に即位する(彼の母親はイシュトヴァーン5世の娘マリアである)。即位後、カーロイ1世は大貴族を平定して王権を強化する。その後新たな金鉱を発掘して金貨の質を高め、王室財政を強化した。他方、ボヘミアやポーランドと同盟関係を結び、神聖ローマ皇帝ルートヴィヒ4世やオーストリア公アルブレヒト2世と敵対する。

カーロイ1世の死後、彼の三男ラヨシュがハンガリー王ラヨシュ1世(在位1342～1382年)に即位する。ラヨシュ1世はヴェネツィアからクロアチアやダルマチアを奪還し、後述するカジミェシュ3世の死後、ポーランド王にも即位する。その後ナポリ王国を一時占領し、バルカン半島でオスマン帝国と対峙する(彼の死後、彼の長女マリアと結婚したカール4世の嫡子ジギスムントが神聖ローマ皇帝とボヘミア王、ハンガリー王を兼ねた)。

カーロイ1世とラヨシュ1世の代に、ハンガリーは人口300万を超える大国に成長した。しかも王室財政が鉱物資源に依拠していたため、農民の負担が軽減している。南塚信吾氏の著作「ハンガリーの歴史(河出書房新社)」によれば、当時のハンガリーの農奴人口は36万～48万人ほどで、他のヨーロッパ諸国と比較して非常に少ない。

(ベーラ4世は1251年に特許状を発布してユダヤ人の入植を促進している。モヒの戦いで惨敗したベーラ4世にとって、ユダヤ人の入植は復興策であったが、ユダヤ人に対するハンガリー王の寛容はその後も続く。マーチャーシュ1世(在位1458～1490年)とナポリ王女ベアトリーチェ(ハンガリー名ベアトリクス)の結婚式では、多数のユダヤ人が正装して門前に整列した)

ヴァーツラフ3世の死後、ポーランドも混乱するが、1320年にクヤヴィ公ヴワディスワフがポーランド王ヴワディスワフ1世(在位1320～1333年)に即位して混乱が収束する。

当時のポーランド領は現在の半分程度であった。他方、ドイツ騎士修道会がさらなる支配地の拡大を目指していた。しかも、戦争好きのボヘミア王ヨハンがポーランド王位を諦めていない。ヴワディスワフ1世は、ドイツ騎士修道会やボヘミア王ヨハンとの戦いを繰り返し、ポーランドの領土と王位を守る。

ヴワディスワフ1世の死後、彼の三男カジミェシュがポーランド王カジミェシュ3世(在位1333～1370年)に即位する。カジミェシュ3世は、ボヘミア王ヨハンに大金を支払い、またドイツ騎士修道会に領土を一部割譲して戦争を終結する。その後ウクライナ西部に侵攻して領土を東に拡張した。政治上の様々な駆け引きと軍事上の駆け引きが交差した結果、旧キエフ大公国のハルィチ公国領をポーランドが支配し、ヴォルィーニ公国領をリトアニアが支配する。

カジミェシュ3世は内政にも尽力した。内政上のもっとも大きな変化はジェムスキエ法の制定と控訴院の設置である。当時、ポーランドの各都市は概ねドイツ都市法＝マクデルブルク法の下で自治を行っていた。そして、マクデルブルク地方裁判所が裁判を引き受けていた。しかしカジミェシュ3世の代からポーランド国内で裁判が行われるようになる。またカジミェシュ3世は農民の負担を軽減し、ユダヤ人を保護した。

カジミェシュ3世の死後、ハンガリー王ラヨシュ1世がポーランド王を兼ねる。そしてラヨシュ1世の死後、彼の末娘ヤドヴィガが10歳で即位する。即位後、ヤドヴィガはリトアニア大公ヨガイラ(ポーランド名ヤギェウオ)と結婚する。ヨガイラ＝ヤギェウオはキリスト教＝カトリックに改宗し、ポーランド王ヴワディスワフ2世(在位1386～1434年)に即位する。その後リトアニアがキリスト教国になり、ポーランドとリトアニアがひとつの国＝ポーランド・リトアニア同君連合を形成する。

ちなみに、カジミェシュ3世がクラクフのヤギェウオ大学を創立したと伝えられているが、開校したのはヤドヴィガである。ヤドヴィガはドイツ騎士修道会との和平に尽力し、リトアニア人の改宗にも尽力したが、1399年の出産で体調を壊し死去する。他方、ポーランド王ヴワディスワフ2世(ヨガイラ＝ヤギェウオ)は対立していたヴォータワタスにリトアニア大公位を授け、自身はポーランドの統治と外交、軍事に専念する。そして神聖ローマ皇帝ヴァーツラフ4世を支持して西方の安全を確保し、タンネンベルクの戦いでドイツ騎士修道会に大勝する(コラム45)。

偶然の一致であったが、14世紀に東欧三国の王朝がすべて外来王朝になる。それら外来王朝は東欧三国の発展に寄与したが、重視すべきことが他にある。  
14世紀中頃、イングランドやフランスで黒死病が流行した。そのため、イングランドとフランスの人口が3割以上減少したと伝えられている。ドイツでも、たとえばリューベクの人口が3割以上減少した。だが筆者が知る限り、ハンガリーやポーランドで黒死病が流行したとの記録がない。だからユダヤ人の入植を受け入れたとも言えるが、14世紀のイングランドやフランスとハンガリーやポーランドのちがいを考察することは、現代の疫病対策に役立つかもしれない。

10世紀～13世紀の間、ハンガリーやポーランドの森林もかなり伐採されている。他方、都市の城塞化が進んだ。歴史家の多くが、レグニツァの戦いとモヒの戦いの敗北が、ハンガリーやポーランドで都市の城塞化が進んだ原因である、と論じている。そして、ハンガリーやポーランドはドイツの都市を模倣した、と論じている。

だが、彼らは都市構造のちがいを調べていない。筆者は、イングランドやフランス、ドイツの都市よりハンガリーやポーランドの都市のほうが公衆衛生(上下水道等)が完備していたように思う。すなわち、外来王朝のハンガリーとポーランドがコンスタンティノープルを模倣して都市を城塞化した可能性がある(長い歴史過程で、コンスタンティノープルは上下水道が完備した都市に発達していた)。

ハンガリーを除けば、次節で述べる「アヴィニオン捕囚」が勃発するまで、ヨーロッパの「立法者」は神聖ローマ皇帝とローマ教皇であった。したがって「立法者」の地位をめぐる皇帝と教皇の争いも生じたが、アヴィニオン捕囚後、ローマ教皇は「立法者」の地位を喪失する。

ただし、ポーランドは例外である。ポーランドでは、ジェムスキエ法を制定したカジミェシュ3世がしばらく「立法者」として君臨する。しかしリトアニアと同君連合を形成した場面でローマ教皇が「立法者」に復帰した。

(とはいえジェムスキエ法は残る。カジミェシュ3世の死後、カトリック教会がジェムスキエ法を改編し、ポーランドの国法＝カジミェシュ法が完成する。筆者の認識では、カトリック教会が慣習法を卑俗法化あるいは超越する「国法」の制定に関与したのはポーランドだけである)

「広義の近代」の出現期前半に東欧三国が異なる「お国柄」を持った。同じことが西欧三国(ドイツ、フランス、イングランド＝イギリス)についても言える。

#### コラム44： 王国と公国のちがい

ヨーロッパでは、皇帝や教皇が国王を承認する。そして国王が公爵を承認する。国王が他の国王の臣下になる場合もあるが、国王が他の国王を承認する場面はない。それが、国王と公爵のちがいである。あるいは王国と公国のちがいである。しかし経済上の大きなちがいもある。国王は金貨や銀貨を鑄造して発行できるが、公爵は発行できない。

とはいえ、皇帝(神聖ローマ皇帝やビザンツ皇帝)から特許状を得た公国や帝国都市等が金貨や銀貨を発行する場面があった。したがって、カール4世が発布した金印勅書は特許状の大盤振る舞いであったと言えるが、大盤振る舞いで得をしたのは選帝侯だけである。当然、他の公爵たちは反発する。

もっとも反発したのがカール4世の娘婿オーストリア公ルドルフ4世である。彼は自身を「大公爵」と称し、チロル地方を併合する。そのためバイエルン公シュテファン2世との間に戦火が生じた。

仲裁に入ったカール4世が特許状を別途発布してルドルフ4世の「大公」位を承認する。以後、オーストリア公国は「大公国」になり、後の「ハプスブルク帝国」の基礎を築く。他方、カール4世がルドルフ4世に与えた特許状＝大特許状が先例になり、歴代神聖ローマ皇帝が様々な特許状を発布するようになる。

むしろカール4世が発布した金印勅書の歴史的意義は他にある。金融業がヨーロッパ全域に広がり、信用取引が増大して金貨と銀貨の役割が分離した。すなわち、金貨が決済手段になり、銀貨が交換手段になる。

長い歳月を経て、金銀複本位制が完成したと言えるが、しかし完成は終わりのはじまりである。次章以降で、金銀複本位制が崩壊する経緯を述べるが、物品貨幣が消滅すれば公爵や伯爵が自前の財貨を鑄造して発行したがるのは当然である。その意味で、カール4世は妥当な政策を実施した。

カール4世の代の神聖ローマ帝国は、概ね平穏であった。フィレンツェから追放されて放浪していた詩人ダンテ・アリギエーリは、ヨハンに同行して戦場に赴きカール4世に謁見し、神聖ローマ帝国を託せる人物であると直感したようだが、彼の直感は正しかったと思う。

#### コラム45: モスクワ大公国の誕生とタンネンベルクの戦い

アレクサンドル1世(アレクサンドル・ネフスキー)の死後、彼の実弟ヤロスラフ3世がウラジーミル・スーズダリ公に即位する。ヤロスラフ3世の死後、後継争いが生じた。とりわけトヴェリィのグループとモスクワのグループが「大公」位を争う。

1328年、ウズベク・ハン(モンケ・テムルの孫。在位1313~1342年。彼の代がキプチャク・ハン国の最盛期である)はトヴェリィを制圧したモスクワ公イヴァン1世の大公即位を承認した。そして他の公国の徴税も委ねる。

イヴァン1世は、ウラジーミル・スーズダリ公国の統治を刷新し、モスクワに東方正教会の府主教座を移す(以後、ウラジーミル・スーズダリ公国を「モスクワ大公国」と呼ぶ)。ウラジーミル・スーズダリ公国=モスクワ大公国は強固になったが、他方、キプチャク・ハン国が混乱に陥る。ウズベク・ハンの死後、内乱が勃発してバトゥ家が断絶する。その後1359~1379年までの約20年に21名の「カン」が即位した。

1373年、モスクワ大公ドミトリー4世(ドミートリー・ドンスコイ)がキプチャク・ハン国への貢税を拒否する。そして1380年、クリコヴォの戦いでキプチャク・ハン国の大軍を破る。しかし新カンに即位したトクタミシュがモスクワを占領したため、再度キプチャク・ハン国に臣従する。だが、その後トクタミシュはティムール帝国と交戦して大敗する。

15世紀に、キプチャク・ハン国はカザン・ハン国とアストラハン・ハン国、クリミア・ハン国等に分裂した。他方、モスクワ大公国はイヴァン3世の代に勢力を拡大し、イヴァン4世の代にカザン・ハン国とアストラハン・ハン国を併呑する。その後「ロシア帝国」に変貌し、クリミア・ハン国も併呑する。

キプチャク・ハン国が混乱に陥っていたため、当時のリトアニア東方は安泰で、ポーランド・リトアニア同君連合の敵対勢力はドイツ騎士修道会だけであった。リトアニアでのヨガイラ=ヤギェウォの地位は万全ではなかったが、ポーランドとリトアニアの利害は一致していた。ポーランドの貴族たちにとって、ポーランド王はドイツ騎士修道会を支援するハンガリー王ジギスムント等よりヨガイラ=ヤギェウォのほうが望ましい。ヤドヴィガとヨガイラ=ヤギェウォの結婚は、ポーランド貴族たちが仕組んだ政略結婚であったが、ヤドヴィガは納得していたと思う。

そして、ヨガイラ=ヤギェウォ(ポーランド王ヴワディスワフ2世)がポーランドに大勝利をもたらす。1410年、ポーランド北部のグレンヴァルトでポーランド・リトアニア同君連合とドイツ騎士修道会の大会戦(タンネンベルクの戦い)が勃発した。ドイツ騎士修道会は大打撃を被り、1411年にトルンの和約を締結して支配地域の拡大を断念する。

(ジギスムントが開催した史上初の国際会議=コンスタンツ公会議は、カトリック教会の分裂=シスマを解消して神学者ヤン・フスを火刑に処したことで有名であるが、タンネンベルクの戦いの戦後処理が会議の主目的であった。ドイツ騎士修道会は、「ポーランド王ヴワディスワフ2世は異教徒であり、異教徒の武装を禁じるべきである」と論じた。また、「ポーランド王とポーランド人を抹殺すべきである」と論じる者もいた。だが、当時のポーランドはローマ教皇を「立法者」と認める数少ない王国のひとつである。ローマ教皇マルティネス5世はドイツ騎士修道会の陳述を却下する)

## 7.4 アヴィニオン捕囚

第3回十字軍遠征に従軍したフランス王フィリップ2世は、王室財政の運営をテンプル騎士修道会に一任したが、会計検査院を設置して歳入と歳出を監視し、また高等法院を設置して不正も監視した。この体制は長く続く。そしてフィリップ4世(在位1285～1314年)が法の制定者＝立法者として君臨する場面でテコにする(会計検査院と高等法院を発明したフィリップ2世は、法の執行者として君臨する場面があっても「立法者」として君臨する場面はなかった)。

すでに述べたが、シチリア晩禱戦争下でフランス王フィリップ3世が戦病死した。フィリップ3世の死後、彼の次男フィリップがフランス王フィリップ4世に即位し、「立法者」として君臨する。フィリップ4世は高等法院を立法府化した。そして、国法＝王国基本法を制定し、自身に有利な法体系を構築する。高等法院は司法府の役割も担うが、他方、フィリップ4世は国王顧問会議＝行政会議を設置し、自身の財政関与を可能にする(慣習法に修正を施して運用する司法府が立法権を支配していた時代が「中世」である。だがフィリップ4世は司法と立法の力関係を反転して国法を制定した。フランスで、他国より少し早く「中世」が衰退しはじめる)。

1294年、国法を制定して法の執行権＝行政権を掌握したフィリップ4世は聖職者身分への課税を決断する。フランス国内の聖職者たちは同意したが、ローマ教皇ボニファティウス8世が反発した。ボニファティウス8世は、フィリップ4世に退位を勧告した。しかし、フィリップ4世は身分制議会＝三部会を開催してフランス国内の聖職者と諸侯、平民代表の同意を得、ボニファティウス8世の弾劾を議決する。ボニファティウス8世はフィリップ4世を破門したが、フィリップ4世は教皇を弾劾する公会議の開催を要求した。

1303年、高等法院法律顧問ギョーム・ド・ノレガとシアツラ・コロナがボニファティウス8世を奇襲して監禁する(アナーニ事件)。ボニファティウス8世は三日後に解放されたが、約三週間後に憤死する。ボニファティウス8世の死後、ローマ教皇に就任したベネディクトゥス11世がフィリップ4世の破門を取り消す。その後ベネディクトゥス11世が死去し、フランス出身のクレメンス5世が新ローマ教皇に就任する。そして1308年、ローマ教皇庁を南フランスのアヴィニオンに移転する。

(歴史家たちは、ローマ教皇庁のアヴィニオン移転を「アヴィニオン捕囚」と呼んでいる。とはいえ、クレメンス5世がローマからアヴィニオンに移動したわけではない。彼がローマに滞在した場面は一度もない)

歴史家たちは、フィリップ4世が聖職者身分への課税を決断したのは、対イングランド戦争の戦費を捻出するためであった、と論じている。その認識が正しいとしても、大きな目的が他にある。筆者は、聖職者身分への課税は、多量の財貨＝フローリン金貨を獲得するためであったと考える(フィリップ4世は、聖職者身分への課税を決断する前に金貨の改鋳や鋳造に失敗している。技術上の問題だけでなく、フランス国内に良質な金山が存在しなかったことも大きい)。

フィリップ4世は、聖職者身分への課税を決断した場面で金納を命じた。だが、ローマ教皇庁にとって、フローリン金貨はシチリア晩禱戦争下で荒廃したイタリアのローマ教皇領を復興するための手段である。ボニファティウス8世が聖職者身分への課税に反発したのは当然であるが、とはいえシチリア晩禱戦争でシチリア島を奪還できなかったローマ教皇に権威などあるはずがない。ポーランド等を除けば、皇帝派と教皇派の闘争、その後のシチリア晩禱戦争の過程でローマ教皇は「立法者」の地位を喪失していた。

(ボニファティウス8世は「聖年祭」を開催して金集めをする程度のことしかやれなくなっていた。しかも華奢と飲酒や賭博を好む傲慢な人物である。彼に反発した詩人ダンテ・アリギエーリは、フィレンツェから永久追放された)

アヴィニオン捕囚と並行して、フィリップ4世はギョーム・ド・ノレガにテンプル騎士修道会士の逮捕も命じる。テンプル騎士修道会は、ドイツ騎士修道会と同様な修道会であったが、1140年に本部をパリに移して金融を営み、莫大な「財(金貨と銀貨、荘園等)」を蓄えていた。すなわち、テンプル騎士修道会は事実上の銀行であり、したがってフィリップ2世は王室財政の運営を一任したわけだが、フィリップ4世は彼らが蓄えた「財」も得ようとする。

フィリップ4世は再度三部会を開催し、テンプル騎士修道会士54名を火刑に処する。テンプル騎士修道会はローマ教皇庁に直属していて、彼らが蓄えた「財」の真の所有者はローマ教皇であったが、教皇庁の所在地はアヴィニオンである。ローマ教皇クレメンス5世は、テンプル騎士修道会士の逮捕と火刑に同意するしかなかった。

「立法者」になったフィリップ4世は、南フランスの王権も強化する。そして1293年、フランス高等法院がアンジュー家＝プランタジネット家からアキテーヌ地方とガスコーニュ地方を没収し、王領化する。当然、プランタジネット家は反発する。

(フランス王ルイ9世とイングランド王ヘンリー3世(ジョン王の嫡子。在位1216～1272年)が1259年に結んだパリ条約により、イングランド王国はロワール川以北の領地(ブルターニュ地方やノルマンディー地方)をすべて失った。だが、ロワール川以南の領地(アキテーヌ地方とガスコーニュ地方)についていえば、ルイ9世はイングランド王国の宗主権を認めていた)

イングランドでは、ヘンリー3世の代に第二次バロン戦争が勃発し、騎士や市民の代表が構成する立法議会(パルラメント)が制定する法の下で国王が執政を行う仕組みができていた。しかしイングランド王エドワード1世(ヘンリー3世の嫡子。在位1272~1307年)は国王評議会=行政会議を編成して王権を強化し、アキテーヌ地方とガスコーニュ地方の奪還を目指す。

1294年、南フランスの領有権をめぐる戦争=ギエンヌ戦争が勃発する。エドワード1世はフランスに侵攻するが、イングランドの諸侯たちは反発する。しかもウェールズとスコットランドで反乱が勃発した。エドワード1世は、アキテーヌとガスコーニュの奪還を断念し、フランスと和約する。そしてフィリップ4世に臣従し、彼の妹マルグリットと婚約する。さらに彼の五男エドワードがフィリップ4世の次女イザベルと婚約する(この政略結婚は、フランスとイングランドの関係を改善するように思えた。しかし英仏百年戦争の原因になる)。

1307年、エドワード1世は大軍を率いてスコットランド侵攻するが、行軍中に病死する。エドワード1世の死後、彼の五男エドワードがイングランド王エドワード2世(在位1307~1327年)に即位する。エドワード2世の治世下で、立法議会が強固になるが、しかしエドワード2世は寵臣政治を行う。立法議会が反発し、エドワード2世は退位した。その後、彼の長男エドワードがイングランド王エドワード3世(在位1327~1377年)に即位する(コラム46)。

(エドワード2世の退位は事実上の廃位であったが、立法議会が国王を事実上廃位したこの事例が後のイングランド国政に影響を及ぼす。すなわち、清教徒革命や名誉革命を「可能な革命」にする。余談であるが、エドワード2世の「廃位」に彼の妃イザベルが加担している。エドワード2世が退位した後、イザベルは愛人のモーティマとイングランド王室をしばらく牛耳るが、エドワード3世はモーティマを逮捕して処刑した。イザベルは隠遁する)

ところで、イサウリア朝ビザンツ皇帝がイコノクラスムを支持し、それにローマ総司教が反発した場面からカトリック教会の歴史がはじまるが、とはいえカトリック教会が「力」を得たのはフランク王国の王統がメロヴィング朝からカロリング朝に変遷した後である。歴史家の多くが、ピピン3世の寄進がカトリック教会を強固にしたと論じている。

だが筆者は、カール1世の死後、ローマ教皇庁が金貨を発行したことのほうが大きい、と考える。すでに述べたが、ローマ教皇庁が金貨を発行するまで、ヨーロッパで金貨を発行していたのはビザンツ皇帝=東ローマ皇帝だけである。ローマ教皇庁が金貨を発行した後、ローマ教皇とビザンツ皇帝の地位が対等になる。そして、ローマ教皇がドイツ皇帝=神聖ローマ皇帝以上に「皇帝」化する場面が生じる。

(社会学者の大澤真幸氏は、著書「日本史のなぞ(朝日新聞出版)」で「宗教的な権威(ローマ教皇)と世俗の政治的権力(神聖ローマ皇帝)との間の顕著な二元性はヨーロッパ中世の他に類を見ない特徴である」と論じている。だが、そのような特徴は、11世紀初頭にオットー3世が死去し、ドイツの皇統がザクセン朝からザーリアー朝に変遷した後、約100~150年続いた程度の「特徴」にすぎない。すなわち、ヨーロッパ中世全般の特徴ではない。むしろそのような特徴が生じる前の時代、すなわち後にドイツの農民たちが「古き良き法の時代」と呼んだ9世紀末~11世紀初頭のほうがヨーロッパ中世を考察する上で重要である。大澤氏は、「11世紀末に、イタリア北部ピサの図書館で「ユスティニアヌス法典」が発見されたのだ。この出来事は、軍隊の動員ということをはるかに越えた意義、法の支配の全般を基礎づける運動の起点としての意義を担うことになった」とも論じているが、ビザンツ帝国は9世紀にバシリカ法を制定してユスティニアヌス法を卑俗法化している。筆者の認識では、大澤氏が著書「日本史のなぞ」で論じる「解釈者革命」は、ビザンツ皇帝がバシリカ法=国法を制定したときからはじまる。ローマ教皇とビザンツ皇帝の対等性を重視するカトリック教会が、おそらくブルガリアからユスティニアヌス法を導入し、ビザンツ帝国の体制を模倣した。そして12世紀に教会法を制定し、「模倣」を強化する。しかしシチリア晩禱戦争後、ローマ教皇が「立法者」の地位を喪失する。そしてフランス王が高等法院を設立し、イングランドで立法議会が誕生した。他方、ドイツでは神聖ローマ皇帝カール4世が金印勅書を発布し、金貨を決済手段化する。ちなみに、大澤氏の著書「日本史のなぞ」は一読の価値がある。その一部を抜粋して大澤氏の言説を批判するようなことはしなかった。しかし、当時のローマ教皇は西ヨーロッパ唯一の金貨発行者である、という事実は重要である。すでに述べたが、ローマ教皇の「力」の源泉は金貨の発行であり、権威などではない。大澤氏は、ビザンツ帝国=中世ギリシャを見ていないし、中世イタリアと中世ギリシャを比較してもいない)

政治学者や社会学者にとって、立法権や司法権と主権はほとんど同義語である。だが、「広義の近代」の出現期前半(12世紀後半~14世紀後半)にフランス王フィリップ4世が高等法院を強化した目的は財貨=金貨の鑄造権と発行権、徴税権の獲得である。その後「広義の近代」の出現期後半(14世紀後半~16世紀後半)に立法権と司法権が法治主義を形成する。立法権と司法権、外交権や交戦権、通貨発行権等が「主権(法を無制限に制定して執行する権利)」を形成したのは「広義の近代」の突破期である。

「広義の近代」の出現期後半に誕生した領邦国家のほとんどすべてが法治国家であるが、とはいえ、国法を厳格に運用するだけの国家は主権国家ではない。設計主義が法治主義に先行する。「法治」は設計を具現する手段で、主権国家の統治者は「立法者」である前に「設計者」である。設計主義の下で国法を制定および再制定し続ける法治国家が主権国家である。

「広義の近代」の出現期後半に、イングランド=イギリスがそのような「準主権国家(あるいは準国民国家)」として人類史に登場するが、ルネサンス運動の影響が大きい。あるいは100年以上続いたルネサンス運動の下で広まったプラトン主義と新プラトン主義の影響が大きい。

中世ヨーロッパでアリストテレスの思想が広まったが、プラトンの思想が広まるのはルネサンス運動以降である(すなわち、中世ヨーロッパでは、アリストテレスが先でプラトンが後である)。次章でルネサンス運動を論じるが、プラトン主義と新プラトン主義を無視できない。

## コラム46: スコットランド王国とスコットランド独立戦争

9世紀中頃に即位したケネス1世が最初のスコットランド王であるが、スコットランド全土を統一したのはウィリアム1世(在位1165~1214年)である。ウィリアム1世はスコットランドのカトリック教会をカンタベリー大司教から独立させ、ノーサンバーランド地方の支配をめぐってイングランド王ヘンリー2世と争う。

ヘンリー2世の死後、リチャード1世がスコットランドの独立を認めた。ウィリアム1世は、1万マルクの軍資金を渡し、ノーサンバーランド地方の売却も要求したが、リチャード1世は拒否する。リチャード1世の死後、ウィリアム1世はジョン王からノーサンバーランド地方を買い取ろうとする。ジョンは売却するつもりでいたが、買い取る前にウィリアム1世が死去する。

ウィリアム1世の死後、後を継いだアレグザンダー2世とアレグザンダー3世はイングランドとの争いを避けた。当時、スコットランド西岸のヘブリディーズ諸島とアイリッシュ海のマン島はノルウェー領であった。ノルウェー(あるいはデンマーク)との領有権争いを抱えていたため、アレグザンダー2世もアレグザンダー3世もイングランドと争う余裕がなかったのである。彼らの代に、ヘブリディーズ諸島とマン島がスコットランド領になる。

1286年、スコットランド王アレグザンダー3世が落馬事故で死去する。若いアレグザンダー3世は嫡子を残さなかった。スコットランド諸侯たちは、ジョン・ベイリヤルを王位継承者に指名し、イングランド王エドワード1世が承認する。

1292年、ジョン・ベイリヤルがスコットランド王に即位する。その後彼の即位を承認したエドワード1世がフランスへの出兵を要求する。だがジョン・ベイリヤルは要求を拒否し、フランス王フィリップ4世と同盟を結ぶ。そして1296年、イングランド北部に侵攻した。しかしエドワード1世下のイングランド軍に大敗して降伏する。ジョン・ベイリヤルはロンドン塔に幽閉された。

1297年、スターリング・ブリッジの戦いでウィリアム・ウォレス率いるスコットランド軍がイングランド軍を撃退したが、翌1298年、フォルカークの戦いで大敗する(このとき、ウェルズが派兵したロングボウ部隊が活躍している。その後ロングボウ部隊はイングランド軍の主力部隊になり、英仏百年戦争で活躍する)。ウィリアム・ウォレスはスコットランド各地でゲリラ戦を展開するが、1305年に捕えられ、八つ裂きの刑に処せられた。

しかしスコットランドの反乱は続く。1306年、ロバート・ブルースが戴冠を強行してスコットランド王ロバート1世に即位する。激怒したエドワード1世が大軍を率いてスコットランドに侵攻するが、本文で述べたように、行軍中に死去する。エドワード1世の死後、イングランド王に即位したエドワード2世はロンドンに帰還する。その後ロバート1世は各地でイングランド軍を撃退する。1314年、エドワード2世は大軍を率いてスコットランドに侵攻するが、バノックバーンの戦いで大敗する(ちなみに、スコットランド軍の勝因は「ゲリラ戦」である。同時代の中国=南宋でも文天祥がゲリラ戦=遊撃戦を展開してモンゴル軍と戦っている。「広義の近代」の出現期に、戦争の形態も変化した)。

ロバート1世はアレグザンダー3世治世下のスコットランド領を回復した。そして1320年、スコットランドが独立国であることを宣言(アープロース宣言)してローマ教皇の承認を得、1328年にイングランドと和約して翌1329年に死去する。

## 7.5 英仏百年戦争の勃発

歴史家たちは、1337～1453年までの間、イングランド王とフランス王、そしてブルゴーニュ公が戦った戦争を「英仏百年戦争」と呼んでいる。英仏百年戦争の結果、イングランドはカレーを除くフランス国内の所領をすべて失うが、初期の戦闘（1337年から約30年の間に各地で生じた戦闘）ではイングランド軍が圧勝している。とりわけ1340年のスロイスの海戦、1346年のクレシーの戦いと1356年のポワティエの戦いで圧勝している（ボエミア王ヨハンがクレシーの戦いに参戦して戦死したことはすでに述べたが、ヨハンはフランス軍に従軍していた）。

本節では、1339年にイングランド王エドワード3世が大軍を率いてアントウェルペン（英語名アントワープ。現在のベルギー第二の都市）に上陸し、1399年にイングランドの王家がランカスター家に移るまでの英仏百年戦争前半を論じる。英仏百年戦争前半は各地の戦闘でイングランド軍が圧勝したが、全面戦争に進展する場面はなかった。

1314年、フィリップ4世が死去する。フィリップ4世の死後、彼の長男ルイガール10世が即位するが、約2年後に死去する。その後次男のフィリップや三男のシャルルが即位するが、短い在位期間で死去する。フィリップ4世の息子が全員死去したため、傍流のヴァロワ伯フィリップがフランス王フィリップ6世（在位1328～1350年）に即位した。フランスの王家がカペー家からヴァロワ家に移るが、他方、イングランド王エドワード3世が自身のフランス王位継承を主張する（エドワード3世の母親はフィリップ4世の娘イザベラであった）。

とはいえ、フィリップ6世が即位した場面でエドワード3世もフランス王に即位するつもりでいたとは思えない。12世紀初頭、イングランドの人口は約200万であった。だが13世紀末頃、400万～500万に増大している。他方、領内の開墾がほぼ完了していて、食料需要を満たすには新たな領地を獲得して開墾する必要があった。したがって当時のエドワード3世が直面していた現実問題は、アープロース宣言の下で独立したスコットランドの再領有である（当時のスコットランドの人口は約40万で、スコットランド南部に開墾可能な土地が残っていた）。

1329年にスコットランド王ロバート1世が死去し、彼の嫡子デイヴィッド2世が後を継いだ。年齢は5歳である。エドワード3世の支援を得たジョン・ベイリヤルの長男エドワード・ベイリヤルが王位を篡奪する。即位後、ベイリヤルはスコットランド南部をイングランドに割譲した。反乱が勃発し、ベイリヤルはイングランドに亡命する。そしてデイヴィッド2世が復位するが、イングランド軍が反乱を鎮圧する。デイヴィッド2世はフランスに亡命した。

その後デイヴィッド2世の甥ロバート・ステュアートがスコットランドを統治する。ロバート・ステュアートのスコットランド統治は1334年からはじまるが、彼がスコットランド王に即位するのはベイリヤルが1364年に死去し、デイヴィッド2世が1371年に死去した後である（デイヴィッド2世にもベイリヤルにも嫡子がいなかった。消去法的に遠縁者のロバート・ステュアートがスコットランド王に即位したわけだが、1371年はステュアート朝の初年になる）。

おそらく、スコットランドの反乱を支援した報復であったと思う。1333年、エドワード3世はフランドル地方への羊毛輸出を禁止する。そして、スコットランドの反乱が一応収まった1339年、大軍を率いてアントウェルペンに上陸する。

イングランドから羊毛を輸入して毛織物を生産し、バルト海沿岸都市や南ドイツに輸出して生計を得ていたフランドル地方の商工業者たちはエドワード3世の羊毛禁輸に困窮していた。彼らは侵略者エドワード3世を「フランス王」に推挙し、エドワード3世は羊毛禁輸を解禁する（ちなみに、イングランドはフランドル地方への羊毛輸出を禁止してもフィレンツェに輸出できた。しかもエドワード3世は多額の借金を抱えていて、貸手は概ねフィレンツェ商人であった）。

1340年、エドワード3世がガン（ベルギーのヘント市）で「フランス王」に即位する。同年、スロイスの海戦が勃発し、イングランド艦隊がフランス艦隊を壊滅する（戦力はフランス艦隊が優勢であったが、海戦中にフランドル艦隊がイングランド艦隊に合流したため、勝敗の趨勢が逆転した）。以後、イングランドがドーバー海峡の制海権を握る。

スロイスの海戦後、エドワード3世は帰国して王権を強化し、その後イングランド軍が北フランス西部に上陸してノルマンディー地方を一部占領する。そして1346年、クレシーの戦いでフランス軍に大勝する。クレシーの戦い勝因は、エドワード3世の長男エドワード黒太子とロングボウ部隊の活躍であったが、フランス軍が無謀な突撃を繰り返したことも大きい。その後黒死病が流行したため、英仏百年戦争前半は一時休戦状態になる。

（1347年に神聖ローマ皇帝ルートヴィヒ4世が死去したこともエドワード3世が戦闘を控えた理由であったと思う。新たに神聖ローマ皇帝に即位したカール4世は内政改革を優先し、対外戦争を控えた）

1350年にフィリップ6世が死去し、彼の長男ジャンがフランス王ジャン2世に即位する。当然、エドワード3世はジャン2世の即位を認めない。1351年、「戦争」が再開した。1356年のポワティエの戦いでフランス軍が大敗し、イングランド軍がジャン2世を捕縛する。

ジャン2世の次男シャルルがフランスの執政を担ったが、1358年にジャックリーの乱が勃発し、ナバラ王カルロス2世やパリ市長エティエンヌ・マルセルが反旗を翻す。しかしシャルルは反乱を鎮圧した。

(ジャックリーの乱は農民の反乱であったと伝えられているが、純粋な農民一揆であったとは思えない。反乱が勃発した地域がフランドル地方に隣接するピカルディや北フランス西部のノルマンディーである。すなわち、イングランドの息がかかっていた地域である)

1359年、エドワード3世は大軍を率いてドーバー海峡を横断し、カレーに上陸する。ロングボウ部隊の攻撃に懲りたフランス軍は後退戦術で応戦した。後退戦術が功を奏し、エドワード3世の侵攻が頓挫する(後退戦術は撤退戦術ではない。ロングボウの長所は連射できる点にある。単射になるが、クロスボウの射程はロングボウより長い。後退戦術はクロスボウの射程を活用するロングレンジ戦法である)。

1360年、イングランドとフランスはブレティニ・カレー条約を締結する。ブレティニ・カレー条約の下でジャン2世を釈放する身代金の額、北フランス東部のカレー市とピカルディ地方、および南フランス西部のアキテーヌ地方とガスコーニュ(アルマニャック)地方の割譲が決まった。他方、エドワード3世はフランス王位を放棄する。

とはいえ、ブレティニ・カレー条約を締結したのはイングランド王とフランス王ではない。エドワード3世の長男エドワード黒太子とジャン2世の次男シャルルである。

エドワード3世は、かつてアンジュー家＝プランタジネット家がフランス領内で保有していたアキテーヌとガスコーニュ、ノルマンディー地方の割譲を望んでいたかもしれない。しかしエドワード黒太子は、ノルマンディー地方の割譲を要求しなかった。彼はノルマンディー地方よりイベリア半島を望んでいた。ブレティニ・カレー条約締結後、エドワード黒太子はアキテーヌとガスコーニュが接するボルドーで「宮廷」をつくり、南フランス西部を統治する。そして1367年、カスティーリャ王国に侵攻する。

このとき、エドワード黒太子は炉税(家庭の暖炉や竈にかける税。事実上の人頭税)を制定して徴税する。アキテーヌの諸侯たちは同意したが、ガスコーニュの諸侯たちは同意しない。ガスコーニュの領主＝アルマニャック伯ジャン1世が、フランス王シャルル5世(1364年にジャン2世が死去し、シャルルがフランス王シャルル5世に即位していた)に直訴し、「ブレティニ・カレー条約は臣民の同意を得て締結した条約ではない、自身は今もフランス王の臣下であり、シャルル5世の家臣である」と述べ、エドワード黒太子に炉税廃止を命じてほしいと懇願した。

1368年に上訴したのはアルマニャック伯ジャン1世だけであったが、1369年に上訴数が1000近くになる。シャルル5世は、エドワード黒太子を召喚したが、エドワード黒太子は応じない。シャルル5世はエドワード黒太子の所領を没収すると宣言し、「戦争」が再開する。

シャルル5世の下で、ベルトラン・デュ・ゲクランがフランス軍を率いる。後退戦術＝ロングレンジ戦法が再度功を奏した。しかも1372年にカスティーリャ王エンリケ2世率いるカスティーリャ艦隊がイングランド艦隊を襲撃する。カスティーリャ艦隊の襲撃は、エドワード黒太子の侵攻に対する報復であった。イングランド艦隊は壊滅する。

1375年、艦隊を喪失したイングランドはフランスと2年間の休戦協定を結ぶ。翌1376年にエドワード黒太子が死去し、1377年にエドワード3世が死去する(そして1380年にシャルル5世が死去する)。エドワード3世の死後、エドワード黒太子の次男リチャードがイングランド王リチャード2世に即位するが、年齢は10歳である。そこでランカスター公ジョン(エドワード3世の四男)がイングランドの執政を担う。

当時のイングランドは、エドワード1世の代の立法議会と国王評議会がひとつになっていた。そして立法議会側の代表者たちが庶民院(コモンズ)を構成し、国王評議会側の代表者たちが貴族院を構成していた。他方、黒死病の流行が原因で農村人口が減少し、税収も減少していた。

「戦争」で逼迫した財政を立て直すため、ランカスター公ジョンは人頭税を制定する。だが1381年、人頭税に反対する民衆が蜂起する。この民乱(ワット・タイラーの乱)は短期間で鎮圧されたが、その後の国政に影響を及ぼす(コラム47)。

1385年、アルジュバロータの戦いでポルトガル王ジョアン1世率いるポルトガル軍がカスティーリャ王フアン1世率いるカスティーリャ軍を撃破する。その後ポルトガルはイングランドとウィンザー条約を結び、ランカスター公ジョンがカスティーリャ遠征の途に出る。

(アルジュバロータの戦いは、寡兵が大軍を誘導して撃破した戦いであった。戦後、ランカスター公ジョンの娘フィリパがジョアン1世の後になる。政略結婚であったが、ジョアン1世とフィリパの夫婦関係は円満であった。そして彼らの息子たちが大航海時代の幕を開く)

他方、リチャード2世は寵臣政治に邁進する。庶民院が反発し、国王評議会が再生した。ただし「向き」がエドワード3世の代の国王評議会と逆である。リチャード2世と国王評議会の宮廷闘争がはじまったが、ランカスター公ジョンが帰国して一応収まる。そして1388年、イングランドは3年間の休戦協定をフランスと結ぶ。さらに1389年、休戦期間を実質25年延長した(レウリンゲン休戦協定)。

リチャード2世が寵臣政治に邁進したのは、フランスとの「戦争」を終結させるためであったように思う。1394年、リチャード2世の後アン(神聖ローマ皇帝カール4世の娘)が死去する。そして1397年、リチャード2世はフランス王シャルル6世の娘イザベラと再婚した。

(シャルル5世の死後、彼の嫡子シャルルがフランス王シャルル6世に即位した。当時、シャルル6世の年齢は26歳である。したがってイザベラは幼い。当時の彼女の年齢は7歳である)

1399年、ランカスター公ジョンが死去する。その後リチャード2世は王権を強化した。内乱が勃発し、ランカスター公ジョンの長男ヘンリーがリチャード2世をロンドン塔に幽閉してイングランド王ヘンリー4世に即位する。1400年、リチャード2世は「餓死」した(コラム48)。

#### コラム47: ワット・タイラーの乱

ジャックリーの乱が純粋な農民一揆であったとは言えないし、民衆の反乱であったとも言えない。しかしワット・タイラーの乱は一揆であり、民衆の反乱であった。反乱の指導者ワット・タイラーがリチャード2世と交渉している最中に、ロンドン市長ウィリアム・ウォルワースがワット・タイラーを殺害したと伝えられている。ワット・タイラーの死後、反乱は沈静化した。

反乱の主目的が人頭税の廃止であったため、ワット・タイラーの乱には商工業者も参加した。首謀者たちは、リチャード2世から何らかの言質を得たと思う(ワット・タイラーと交渉する前に、リチャード2世は他のリーダーたちと交渉している)。

その後リチャード2世はフランスとの休戦協定締結に尽力した。理由は、民衆の負担を軽減して反乱の再発を防止するためである。したがって、ワット・タイラーの乱は一応の成果を獲得した民衆の乱であった、と言わなければならない。思想面で反乱を指導したのはジョン・ポール神父である。彼が語った「アダムが耕しイヴが紡いだとき、誰がジェントリ＝地主だったのか」という言葉は有名である。反乱鎮圧後、ジョン・ポール神父は捕らえられ、八つ裂きの刑に処せられた。

ジョン・ポール神父は神学者ジョン・ウィクリフを信奉していた。ジョン・ウィクリフの思想は、ボヘミアの神学者ヤン・フスにも影響を与え、後の宗教改革にも影響を与えるが、重要なことは、彼が聖書を英訳したことである。リチャード2世の最初の後アン(神聖ローマ皇帝カール4世の長女)がスラヴ語に翻訳された聖書を持っていたことが動機になったと伝えられている。

コラム17とコラム26で述べたように、キュリロスとメトディオスの兄弟、そして彼らの弟子たちが聖書をスラヴ語に翻訳している。その後、東方正教会＝ギリシャ正教会では聖書を様々な言語に翻訳して読む行為はごく普通の行為になった。筆者は、アンが持参した聖書は東方正教会がギリシャ語に翻訳した聖書であったと考える。ジョン・ウィクリフは東方正教会(そしてバシリカ法と古代ギリシャ哲学)に高い関心を抱いていたのかもしれない。

当時、オクスフォード大学は学問の自由を盾にジョン・ウィクリフと彼の賛同者たちを保護した。小国ながらビザンツ帝国が復興し、西ヨーロッパのカトリック教会が揺らいでいたとも言えるが、「広義の近代」の出現期に大学＝学府が教会以上に「聖域」化する。

ちなみに、世界最初の大学はイタリアのボローニャ大学である。創立年度は1088年で、神学部の他に法学部が存在した。法学部の存在が、大学と聖堂学校や修道院学校等との大きなちがいである。パリ大学やプラハ・カレル大学にも法学部が存在した。オクスフォード大学にも法学部が存在した。そして、法学部を有する大学が「国法」を編纂し、皇帝や国王が「立法者」として君臨する法治国家を可能にする。

#### コラム48: 反ウィクリフ派(反ロラード派)法

1401年にヘンリー4世が制定した反ウィクリフ派法は、聖書を英訳したり英訳した聖書を読むこと、またジョン・ウィクリフの著作を読むことを禁じ、違反した者を火刑に処する法である。にもかかわらず、英訳した聖書を読んだ人は多かったようである。彼らは「ロラード派」と呼ばれ、約100年、地下活動を続けた。とはいえヘンリー4世の代にジョン・バドビー、ヘンリー5世の代にジョン・オールドカースルが処刑されている。

## 7.6 オスマン帝国の誕生と危機

1308年、分裂状態にあったルーム・セルジューク朝が断絶する。他方、イル・ハン国でイスラーム教に改宗したガザン(在位1295~1304年)とオルジェイトウ(在位1304~1316年)が相次いで死去する。オルジェイトウの死後、カンに即位したアブー・サイード(在位1316~1335年)は凡庸で、彼の死後、フレグの家系が断絶してイル・ハン国は事実上消滅する。

その後西アジア各地で軍閥が跋扈するが、当初、オスマン家もそれら軍閥(ガーズィー)のひとつにすぎなかった。だが、支配地域がビザンツ領に隣接していた。そして同盟国イル・ハン国を喪失したビザンツ帝国は小アジア領を放棄していた。オスマン家の首長オスマン・ベイは軍略と政略を駆使して小アジアのビザンツ領を侵食し、支配地域を広げる(コラム49)。

(オスマン家はムスリム系軍閥であったが、オスマン・ベイの生涯の盟友はギリシャ正教徒系軍閥を率いるキョセ・ミハルである。オスマン・ベイとキョセ・ミハルの友情が語り継がれ、それがオスマン帝国の寛容さを支え続けたのかもしれない)

1326年、オスマン・ベイが死去する。オスマン・ベイの死後、彼の嫡子オルハンが後を継ぐ。オルハン率いるオスマン軍はマルマラ海沿岸の小アジア都市ブルサを陥落して占領した。その後オスマン軍はニカイア(現在のトルコ共和国イズニク市)やニコメディア(現在のトルコ共和国イズミット市)等の小アジア都市も陥落して支配する。

オルハンは宰相制度を確立し、外部(マムルーク朝等)からイスラーム法学者を招いて民政を委ねた。他方、銀貨=アクチェ銀貨を鑄造して発行し、ニカイアでイスラーム学院=メドレセ(アラビア名マドラサ)を開校する(ちなみに、旅行家のイブン・バットゥータがオルハンに面会している)。

当時、ビザンツ帝国ではパレオロゴス家とカンタクゼノス家(ヨハネス・パレオロゴスとヨハネス・カンタクゼノス)が帝位を争い、ヨハネス・パレオロゴスと同盟を結んだセルビアとブルガリアがビザンツ版図に侵攻していた。ヨハネス・カンタクゼノスはオルハンに援軍を要請する。

1337年、オルハンの長男スレイマン率いるオスマン軍がダーダネルス海峡を越えてバルカン半島に進軍し、セルビア・ブルガリア連合軍を撃破した。そしてカリポリス(現在のゲリボル)に拠点を築く。しかし1357年、スレイマンは落馬事故で死去する。そして1362年、オルハンも死去する。

オルハンの死後、彼の嫡子ムラトが後を継ぐ。ビザンツ帝国では、ヨハネス・カンタクゼノスが政争に敗れて蟄居し、ヨハネス・パレオロゴス=ビザンツ皇帝ヨハネス5世が即位していた。だがムラトにとって、ヨハネス・カンタクゼノスは義母の父である(ヨハネス・カンタクゼノスの娘テオドラがオルハンの後妻になっていた)。

1363年、ムラト率いるオスマン軍がアドリアノーブル(現在のトルコ共和国エディルネ市)を占領する。さらにフィリップポリス(現在のブルガリア共和国プロヴディフ市)やセレス(現在のギリシャ共和国セレス市)等を占領し、トラキア地方を支配した。ビザンツ帝国はコンスタンティノーブルとその周辺を支配する「小半島国家」になる。

ムラトは常備歩兵軍団(イエニチェリ)を編成し、随時進軍可能な体制を築いた。他方、宰相のチャンドルル・カラ・ハリルにも軍事権を与え、東方と西方への同時進軍が可能な体制も築く。ムラトは小アジアの支配地域を拡大し、ブルガリアを併合してバルカン半島の支配地域も拡大した。そして1387年、テッサロニキを陥落して占領する。その後ビザンツ皇帝マヌエル2世がムラトに臣従する。

1389年、ムラト率いるオスマン軍とセルビア・ボスニア連合軍の戦闘が勃発する(コソボの戦い)。戦闘はオスマン軍の圧勝であったが、謁見の場でセルビア貴族ミロシュ・オビリッチがムラトを刺殺した。急遽ムラトの嫡子バヤズイトが後を継ぐ。バヤズイトは戦場にいた兄弟を全員殺害し、セルビアと和約した。他方、小アジアで反乱が勃発し、ビザンツ皇帝マヌエル2世が離反する。

バヤズイトは小アジアの反乱を鎮圧し、その後コンスタンティノーブルを包囲する。1396年、ハンガリー王ジギスムント(神聖ローマ帝国皇帝カール4世の次男。ジギスムントも後に神聖ローマ帝国皇帝即位する)率いる東西ヨーロッパ連合軍がバルカン半島に進軍した。そしてニコポリスでバヤズイト率いるオスマン軍と激突する(ニコポリスの戦い)。しかし東西ヨーロッパ連合軍=ニコポリス十字軍は大敗した。その後バヤズイトはペロポネソス半島を概ね占領し、カイロ在住のカリフからスルタンの称号を得て「バヤズイト1世」に即位する(以後、オスマン家の王朝国家を「オスマン帝国」と呼ぶ)。

ニコポリスの戦い後もバヤズイト=バヤズイト1世はコンスタンティノーブルを包囲し続けた。だがコンスタンティノーブルは陥落しない。他方、小アジアの軍閥=ムスリム諸侯が再度反旗を翻す。バヤズイト1世は小アジアに戻り、ムスリム諸侯を平定する。1398年、オスマン軍がコンヤを陥落し、オスマン帝国は小アジアを概ね支配した。

バヤズイト1世率いるオスマン軍に撃破されたムスリム諸侯たちは、東方のティムール帝国を頼る。1402年、ティムール率いる大軍がオスマン帝国に侵攻し、アンカラでバヤズイト1世率いるオスマン軍と激突した(アンカラの戦い)。オスマン軍は大敗し、バヤズイト1世は捕縛されて死去する。アンカラの戦い後、オスマン帝国は分裂するが、バヤズイト1世の次男メフメト1世が再建する。そしてメフメト2世の代に最盛期を迎える(コラム50)。

コラム45で述べたが、キプチャク・ハン国はウズベクの代が最盛期である。イル・ハン国はガザンとオルジェイトウの代が最盛期で、チャガタイ・ハン国はエセン・ブカ(在位1309~1320年)とケベク(在位1309~1320年)の代が最盛期である。その後それら「三大ウルス」は衰退して分裂するが、チャガタイ・ハン国の後継国がティムール帝国である。

(「三大ウルス」の最盛期と衰退、および分裂に同時代性がある。突厥やウイグルがそうであったが、遊牧民国家は寒さに弱い。そして12世紀後半から地球が寒冷期に入り、14世紀に「小氷河期」が勃発している。地球の寒冷化が「三大ウルス」が衰退して分裂した原因のひとつかもしれない)

ケベクの死後、チャガタイ・ハン国はアラル海からバルハシ湖までの地域(モーグリスタン)とアラル海に注ぐアム川とシル川に囲まれた地域(マーワラーアンナフル)に分裂する。そして分裂したチャガタイ・ハン国をティムールが再統一した。その後ティムールは版図をホラムズ地方(カラル海とカスピ海の間)や南コーカサス地方、ホラーサーン地方やパンジャーブ地方(バクトリアおよびガンダーラ)、ファールス地方(イランのペルシャ湾沿岸)やメソポタミアに拡大し(すなわち、チャガタイ・ハン国とイル・ハン国をひとつにまとめ、さらにインドの一部を併合し)、「ティムール帝国」を建国する。そしてアンカラの戦いでオスマン軍を破る。

オスマン軍が大敗した原因は兵員数の差である。小アジアやメソポタミアのムスリム諸侯たちが合流し、ティムール軍は大軍に膨らんでいた。しかしモンゴル帝国の再現を目指すティムールにとって、アンカラの戦いは余計な戦いであった。ティムールはムスリム諸侯たちに所領を分配した後、帰国して東征するが、行軍中に死去する(コラム51)。

#### コラム49: イル・ハン国の国教

イル・ハン国はキリスト教国であったが、ガザンが改宗してイスラーム教国になる。当時のイル・ハン国は民衆の大多数がイスラーム教徒であった。ガザンは改宗するしかなかったと思う。

(イル・ハン国以前にメソポタミアやイラン高原を支配したセルジューク朝やホラムズ・シャー朝の国教はシーア派イスラーム教である。したがって当時のタブリーズの住民は大多数がシーア派イスラーム教徒である。ガザンもシーア派への改宗を望んだが、スンナ派に改宗した。ホラーサーン地方を統治してチャガタイ・ハン国との争乱を回避するにはスンナ派に改宗する必要があったのかもしれない)

カザンは名君であった。彼は宰相ラシドゥッディーンに「集史(モンゴル史)」の編纂を命じている。カザンの死後、オルジェイトウ(カザンの弟)が「カン」に即位する。オルジェイトウも名君であった。彼はシーア派十二イマーム派に改宗する。

ガザンとオルジェイトウの代のイル・ハン国でスーフィー修道僧(ダルヴィーシュ。イスラーム神秘主義の僧)のサフィー・アッディーンがサファヴィー教団を創立し、やがてサファヴィー教団がサファヴィー朝ペルシャを開国する。

サフィー・アッディーンはスンナ派に属していたが、サファヴィー朝ペルシャの国教はシーア派十二イマーム派になる。カザンとオルジェイトウの代のイル・ハン国で十二イマーム派の信徒が増大し、サファヴィー教団が迎合したのかもしれない。現在のイラン・イスラーム共和国の国教もシーア派十二イマーム派である。

余談であるが、日本の学者や評論家、ジャーナリストたちはスンナ派とシーア派のちがいや対立を誇張しすぎているように思う。筆者は、現在の西アジアやアフリカで生じている紛争は、スンナ派とシーア派のちがいや対立を棚上げして考察するほうがよいと考える。日本では、スンナ派とシーア派の人々が親しく共存している。

## コラム50: バヤズイトの兄弟殺し

コラム37で述べたが、アッバース朝カリフ＝ムスタアシムの子孫＝ムスタンスィル2世がシリアのダマスカスに逃れ、それを知ったキト・ブカ率いるモンゴル軍がダマスカスを陥落した。しかしバイバルス率いるマムルーク朝ムスリム軍がモンゴル軍を殲滅する。その後バイバルスはムスタンスィル2世をカイロで庇護した。そして1517年にムタワッキル3世が死去するまで、カイロ・アッバース朝カリフが続く。

マムルーク朝でのカリフとスルターンの関係は江戸時代の天皇と将軍の関係に似ている。同じことがティムール帝国のハン(皇帝)とアミール(将軍)の関係についても言えるが、バヤズイトにスルターンの称号を授けたのはカイロ・アッバース朝カリフである。

歴史家たちは、ムラトもスルターンを自称していたことを根拠にして、カリフがバヤズイトにスルターンの称号を授けたことをあまり重視しない。だが筆者は大きな意味があったと考える。なぜなら、バヤズイトは兄弟を全員殺害してムラトの後を継いだからである。兄弟を全員殺害したバヤズイトに、臣下を束ねる上でカリフの許しが必要であった(ちなみに、人望は彼の弟ヤクブのほうが高かったようである)。

バヤズイトの兄弟殺しは、セルビアと和約するためであったと思う。おそらく、彼の兄弟たちは和約に反対した。だがバヤズイトは至急小アジアに戻り、ムスリム諸侯たちの反乱を鎮圧しなければならなかった。また離反したビザンツ帝国を懲罰しなければならなかった。バヤズイトは兄弟を殺害するしかなかったと思う(バヤズイト即位後、多くのセルビア人が常備歩兵軍団＝イエニチエリの兵員になった。彼らはアンカラの戦いでティムール軍と戦い殲滅した)。

その後「兄弟殺し」がオスマン家の「伝統行事」になる。一部の歴史家が、この「伝統行事」を「専制君主国家を維持するためであった」などと論じている。彼らは国教を甘く見ている。国教は中世帝国の最高法規である。国教の長＝カリフがバヤズイトの兄弟殺しを容認したことが、その後の兄弟殺しを肯定し続けたと言える。

筆者のレベル4パースペクティヴに従えば、世界帝国と中世帝国はちがう。とはいえ世界帝国は中世帝国の末裔である。オスマン帝国はメフメト2世の代に世界帝国に変貌するが、オスマン家の「伝統行事」は世界帝国が「広義の中世」の成熟期の産物で、同時に中世帝国の末裔でもあることを意味する。

## コラム51: ティムール帝国

ティムールの死後、ティムール帝国はシャー・ルフ(在位1409～1447年)とウルグ・ベク(在位1447～1449年)の代に最盛期を迎えるが、その後内紛と内乱が勃発し、サマルカンド政権とヘラート政権に分裂する。そして1500年、シル川を越えてサマルカンドに侵入したウズベク・ハン国(シャイバーニー朝)のムハマド・シャイバーニーがティムール帝国を滅ぼす。このとき、インドに逃れたバーブルがムガル帝国を建国する。

ところで、歴史家の川口琢司氏は、著書「ティムール帝国(講談社)」でティムール帝国の帝都サマルカンドの人口は30万以上であったと論じている。川口氏は推定は正しい。サライの人口は60万以上との説もあるので、サマルカンドの人口は少なく見積もっても30万以上であったと思う。

サマルカンドは当時の巨大都市であった。ティムール帝国は文化水準が高く、治安や衛生状態もよかった。世界各地から様々な物産がサマルカンドに集まり、周囲で農耕が行われていた。ティムール帝国も銀貨を鑄造し、版図内各地で他の鉱物資源も採掘した。サマルカンドやヘラートでは、照明や暖房で石油が使われていたようである。

とはいえ製造業が不明である。アッバース朝イスラーム帝国が最初に製紙工場を建設した場所はおそらくサマルカンドである。また「広義の中世」の突破期の中央アジア(西遼や西ウイグル王国が存在した頃の中央アジア)は製造業が主力産業であった。だが、ティムールは各地から職人を集めたようだが、サマルカンドで毛織物や綿織物の製造が行われたという記録がない。すなわち、石油を精製して照明や暖房で消費するくらいに科学が発達していながら、製造業が発展していない。

中央アジアの製造業の衰退がシルクロードの衰退につながった。そしてユーラシア大陸東西の力関係の逆転にもつながったように思う。ただし、それが露呈するのは「広義の近代」の突破期である。